

敵の戦死者を葬る

本庄藩の使者三番大隊

に來り和議を乞ふ

龜田藩士四隊來り和議を乞ふ

田村方面に當りて砲聲夥しく聞ゆ則ち二番大隊斥候を出して之を見せしむるに後に殘し置く一の關勢角間村より官軍寄來るに逢て勝軍せんと報す同十二日一番大隊併田より再び横手に趣き昨戰場を檢するに柵内に壘を横へ楯にせしものゝ如く其内に半焦爛したる屍數十あり又二番大隊の向ふたる羽手の門前に拾四五人枕を并て自刃するあり其情實に悲哀あり依て其屍を悉く城北の龍昌院に葬り僧を招きて讀經し佐竹氏名臣戸村忠士の墓と記したる標木を建て一隊皆禮拜して去る茲に於て死者の衷情を想察し暗涙にむせぶもの多し二番大隊は赤坂を發し昨一の關勢の戰場を経て田村新町に陣し此日より一の關勢六小隊二番大隊に属して其指揮を受く又仙藩の隊長柴田中務一大隊上遠野伊豆四小隊を卒ひて來り明日角間川の先鋒を乞ふ三番大隊には八月六日汐越にあり同日暮ふ及て金の浦に出張せし小隊の許に本庄

の士貳名來り本庄候の降を乞ふ且つ本庄には諸方無頼の輩入込み乱暴甚しく良民大に苦しむ依て兵を出し鎮撫せられんとを乞ふと云ふ依て此由を直に汐越の大隊に報す同く七日藩候を此地に奉迎すへしと答ふ兩士諾して歸る此日龜田藩の士矢島に來り隊長に面會を乞ふ依て林茂助朝比奈長十郎出て之に面し士曰く今回のと謝するに辭あり然りと雖も大藩に隣りし官軍に迫られ終に干戈に及ひたり衷情想察の上今後周旋を依頼しと云ふ茂助長十郎答る様其情想察するに足る然りと雖も我海岸の兵既に貴藩の境に迫る此場合に於て其實効を立らるゝにあらすは隊長へ申難しと云ふ士曰く然らば寡君の妹を質とせんと云ふ茂助長十郎再曰く君候御來陳あるに於ては充分盡力せんと云ふ兩士悦ひ諾し然らば明後日寡君を此地に伴ふへしと云ふ澤は留り高野は歸る此由隊長水野藤彌に告ぐ藤彌之を鶴岡に急報す且つ新

徵三小隊農兵一隊急に鶴岡に歸るへき命あるを以て直ちに之を歸す八月八日三番大隊は夜未だ明さるに平林安倍柴田等の六小隊沙越金の浦兩所より發し本庄に赴くの途龜田藩士貳人來り本庄の情を告く諸隊進て本庄に入る其様前日約する所に違ふ安倍隊に於て該藩士壹人を捕へ之れを詰問するに君候は既に秋田に赴き巽に約する所は重臣等一時の計略なる由を陳ふ依て諸隊相議し此所に兵を置くへきにあらすど柴田雄藏か壹隊を留めて三道兵を分て引くと數丁にして雄藏か使追ひ來り本庄の兵十五六人來り我隊に當らんとするを以て一隊引返すへしと告く安倍平林隊急き返す途中雄藏に逢ふ雄藏首貳級を携ふ雄藏曰く本庄の家老金澤雄太夫用人某馬に乗り我陣に來る其舉動甚た不敬あり依て前日の約に違ふことを責む彼れ窮して逃けんよせしより之れを斬殺せんと云ふ依て雄藏隊と相共に出戸村に引返す之れより

仙臺藩  
援兵を  
乞ふ

龜田候  
三番大  
隊の陣  
來る營

先き仙臺藩より宮澤要作を使として鶴岡に遣し封境駒ヶ嶽及福島の危急を告げて援兵を乞ふ依て此日山口八郎兵衛北楯小八關甚兵衛の三小隊を仙臺に遣はし白井吉郎は仙臺に在て仙米各藩の動靜を探り駒ヶ嶽の官軍を退けしは羽奥の同盟其變おきを保しと報告す同じく九日龜田藩佐藤勘解由金の浦に來り三番大隊に龜田候の出城を告ぐ小隊長加藤扇五郎人を遣はして此由を沙越に在る大隊長酒井兵部に告く暫くして菅沼由之丞來り龜田候今日龜田を出て船にて金の浦に至らんとするに風波に遮られ平澤に上陸し今此地に至ると報す茲ふ於て小隊長堀平太夫金の浦を發し道に迎ふ龜田候赤旗一流を立從者僅に貳拾七人我小隊長山内寛之助丹羽庄右衛門前後を警衛して沙越に至る其情想察するに余りあり同十一日龜田候の婦人及一族金の浦に至る依て之れを鶴岡に護送し八月十三日一番大隊横手を發し今朝服部純藏

仙藩の  
兵角間  
川に敗  
らる

隊より斥候に出したる町野嘯二野荒町村入口に於て官軍に  
逢て殺さる大隊は進て谷地中村に屯し外に卒三小隊を野荒  
町村に進め又松山藩兵は中關村に駐む二番大隊は仙藩の兵  
先鋒として角間川に進む大隊長酒井吉之丞諸隊を部分して  
不慮の進撃に備へ相良鍋之助外數名を出して仙兵戦の様を  
見せしむ仙兵進て角間川に迫る官軍正面と左の杉森に散兵  
して發炮し仙兵屈せず平押に進む所を官軍急に左右の翼を  
張り大小の炮を亂發し仙兵大に避易し隊伍殆ど乱れんとす  
相良等急に大隊に歸りて此狀を告ぐ依て速に上田傳十郎水  
野郷右衛門酒井治郎右衛門山形藩の兵を應援せしむ途に仙  
兵大に亂れ逃げ來るに逢ふ仙藩の隊長芝田中務手負て退く  
官軍機に乘し銳氣甚た熾んちり大隊長酒井吉之丞諸隊を卒  
ひて田村新町より軍を進め先づ寺内權藏か半隊長村井敬治  
を川原に散兵せしめて官軍に發炮せしむ又阿部平三郎隊も

八月二十  
三日大  
番隊  
官軍を  
角間川  
に破る

官軍  
路川  
溺るに

進む兩隊共偽兵を作りて川原荆藪の間に旗數流を立てしむ  
次に竹内右膳隊の軍役隊は遙右の方より角間川を指して進  
む官軍勝に乗して進撃するを水野郷右衛門兵を伏して一齋  
に發炮せしかは官軍村外杉林の中に潜て發炮し水野隊屈せ  
すして進む其間最も近し双方の砲煙一時日光を蔽ふに至る  
此時上田隊は角間川横合より兵を散して進み葛野村笹巻村  
を放火し官軍之れか爲めに挫け軍機漸く動く又一の關勢二  
小隊は左方より川を涉りて進む大隊長旗下ふ令して總軍鼓  
繰して進撃し官軍彌々動き村中に立てたる赤地に白く扇の  
紋を置きたる大旗小旗を巻きて退く味方機に乘し突進し水  
野隊先登村中に入り火を放ち官軍大に敗し半隊長松平角之  
助等官軍數人を斬殺し官軍角間川を涉りて退かんとするも  
船あし漸く一艘を得て數百人我先にと乗付く船沈み溺るゝ  
もの限りあし味方川中に漂流するを炮殺する事あし酒井治

郎右衛門其隊を卒ひ船壹艘を得川を涉り追撃せしかは官軍  
 悉く退く味方勝鬨を三呼し水野上田寺内の三小隊を止めて  
 大隊は田村新町に引上く八月十四日一番大隊には仙藩頼り  
 に先鋒を望みしかは則ち之れを先鋒とし續て谷地中村を發  
 し野荒町村を経て六郷に進む仙藩の四小隊は角の館の押へ  
 として横澤に備へ八小隊は本道より進む大隊未だ驛中を出  
 てさるに西方に當り炮聲夥しく聞へしかは服部小隼人石川  
 猪太夫石原藤助か三小隊急に驛外に出て遙に之れを望見す  
 るに仙藩の先鋒官軍の進撃に逢ひ大に敗して引歸る官軍勝  
 に乘して追撃甚た急ありしかは石川隊は直ちに右の田圃に  
 伏し服部隊は左の田圃に兵を散し石原隊は石川隊の右方に  
 進み服部純藏黒谷市郎の二小隊は又其右方よりし上田千藏  
 は大炮を率ひて本道の右より進む竹内大作隊及松山藩の兵  
 は本道より進みて頻りに發炮すると雖も官軍少しも屈する

色かく追來る斯る所に仙藩の敗兵も味方に勵まされ取て返  
 し一齋に發炮せしかは官軍終に堪へ兼ね高畑村に引退く石  
 川隊の半隊長中村頼母卒拾人計りを引連れて右より進炮撃  
 せしも傷を負ひ又部下傷を被るものあるを以て引退く官軍  
 終に此所にも堪兼ね引退きしかは味方小貫村まで追撃し總  
 軍六郷村に引上く此日二番大隊田村新田より角間川村に轉  
 し角間川近傍の村民川に網して昨日戦死者の屍を引揚げ衣  
 服等を剥き取る体甚た悪むへし水野郷右衛門隊の卒曰く佐  
 竹の大旗を立てたる隊長と覺しき士彈丸に當り川に入れり  
 と告く依て船を出して搜索するに果して其屍を得たり助川  
 散之進と姓名を記したる票及金子多く携へたり之れを取り  
 て大隊長に呈し大隊長之れを昨日最も戦功ありし水野上田  
 酒井の諸隊に給す其屍を該村の寺院に葬りて讀經せしむ仙  
 藩の兵民財を掠るものありと訴ふ依て仙藩の隊長と議して

官軍の  
問謀を  
捕る

其主謀者壹人を斬に處す以て軍規を正し爾來掠奪を謀るも  
 のなし此日三番大隊は石脇より龜田に進む又四番大隊も亦  
 幡屋より龜田に入る同十五日一番大隊小貫高畑に進み二番  
 大隊は角間川村にあり相良總右衛門隊にて官軍の間諜武人  
 を捕ふ壹人は角間川居住の足輕にして但見仙助と云ふ壹人  
 は西馬内村の農民幸太と云ふものあり官軍の事情を尋ぬる  
 に仙助供述を拒む依て之れを斬る幸太は上田傳十郎乞ふて  
 家撲とちす薄暮川野目村に陣を移す此日矢口總四郎庄内よ  
 り來り高橋金藏に代る四番大隊は秋田藩佐竹將監の家人菊  
 地仲佐久間伊之助を捕へ軍情を問ふに左の如く供述す  
 一澤三位殿八月七日横手に出張  
 一九條殿醍醐殿は久保田  
 一永蟄居戸村十太夫重大の進平本正  
 一肥前勢千人計(三分一)隊長鍋島上總

- 一筑前勢三百人計り小倉勢五百人計り
- 一八月十一日松浦勢氣船二艘に乗して久保田に着の由
- 一弘前敗兵仙北に趣き梅津小太郎と一手にかる由長崎勢三  
百五十人計り同所に行く
- 一大山格之助山本登雲齋參謀にて久保田の政事を司ると雖  
も不和の由
- 一本庄候并に藩士久保田に來ると雖も新庄矢島の兩候は未  
た久保田に來らず
- 一荒川久太郎佐藤日向兩隊は長濱に出張
- 一澁江内膳人數は參謀に従て向ひ野にあり
- 一秋田城下にある所の本藩兵は貳千七八百に過ぎず
- 同十六日一番大隊小貫高畑より大曲に進む官軍引て神宮寺  
馬鞍村にあり黒谷市郎石原藤助の二小隊花楸村近傍に出て  
官軍の動靜を窺ふ官軍は馬鞍村と神宮寺村の間を流るゝ

玉川上流より下流新川落口まで川の彼方に胸壁を築き又神宮寺嶽の山上にも数千の兵を置く味方の斥候之れを窺はんとすれば直ちに發炮し守備甚た嚴密なり味方此所を進み行かんと甚た難し同十九日一番大隊昨夜議せし如し二番大隊は南外川を涉り二小隊を西根の邊に残し神宮寺嶽の官軍に當らしめ其他の兵は太平山の外を回りて南橋岡に進撃せんとす依て大隊を花楸に進めて官軍の勢を挫かんとす午后二時南橋岡に當り煙烟の起るを見る之れ則ち二番大隊勝利を得たるをちらんと一番大隊四ツ谷鷺野より急に石川陶山黒谷竹内上田等の五小隊を玉川の河岸に進ましめ官軍は神宮寺嶽の山上山下に充満し一齋に打出し彈丸殆ど雨の如く進み得ず暮に及て味方大曲に引返す夜に入りて使を二番大隊に遣はし軍の様を問はしむるに二番大隊川の目村を發し新川渡り間道島部越と云ふ所を越へ太平山の麓に至り橋岡に進

撃せしかは官軍堪へず引退くを上田相良の二小隊及一の關勢の大砲隊川原と山手に兵を配して追撃せしに神宮寺嶽と太平山より打出し彈丸繁くして進むを得ず終に橋岡に引退く此日二番大隊橋岡に軍を駐む翌廿日一番大隊より遣したる使者歸り來り二番大隊明日橋岡より押出し神宮寺嶽を攻るを以て一番大隊も兵を分けて岳の東を守られんとを望むと報す則ち竹内大作か隊と松山藩兵を分けて之れに當らしむ二番大隊には上田傳十郎水野郷右衛門をして神宮寺嶽と太平山の官軍を襲ふべき要地を見せしむ二隊長溪谷を潜行して之れを求むると雖も皆絶壁にして兵を進むるに便からず依て山麓の民家に放火して引返す官軍大に驚き急に發炮すれども遠くして彈丸達せず同廿一日一番大隊には長澤陶山上田か隊花楸に進て山上の官軍と炮戦し同廿二日二番大隊は神宮寺嶽の官軍を攻めんと一番大隊に告ぐ一番大隊に

の服部純藏竹内大作及松山藩の兵花楯より神宮寺嶽に向て  
 發炮し暮に及て大曲に引返す二番大隊は上田水野の二小隊  
 に應援として寺内權藏隊を加へ山に傍て神宮寺嶽を襲ひ一  
 の關勢は川に傍て進み諸隊之に續て進撃終日炮戰して諸隊  
 檜岡に引返す檜岡は神宮寺嶽を右にし太平山を後とす大曲  
 花楯を距ると貳里余川畔に愛宕山あり山上より官軍の動靜  
 を瞰下するを得此所より一帶の川流れて神宮寺川に入る神  
 宮寺川と稱するは仙北玉川兩川の下流にして荒屋に至り海  
 に入る其間淺瀬の向岸に岩胸壁を築き船壹艘も出さずれば  
 味方渉るべき様亦く殆ど之れに窮し唯た官軍に對し日を暮  
 らしに過ぎす同廿二日大曲より西北方長土呂の渡場に當り  
 炮聲頻りに聞へしかは之れ四つ谷を守る仙藩の兵官軍の襲  
 撃に逢ふあらんと急に一番大隊より石川石原服部の三小隊  
 を遣はして之を援はしむ三小隊福田村まで進みしかは仙藩

八月廿一日  
 三番大隊  
 花楯を破る

の兵散々にありて退き來るに逢ふ官軍は勝に乗し勢銳く追  
 ひ來り四つ谷村に於て彼我相逢ふ直ちに炮戰すると雖も味  
 方三小隊官軍は戰勝に乗して烈しく發炮せしかは味方死傷  
 あり終に堪へ兼引退く官軍長驅せすして引返す始め三小隊  
 大曲を發する刻火光玉川に傍ひて進み終に花楯に向ふ之官  
 軍花楯を襲ふあらんと一番大隊急に諸隊を部署して之れに  
 備へ大隊長松平甚三郎諸隊を督して大曲村外にあり官軍は  
 次第に近き午後二時頃に至りて戰漸く熾んに大小の炮聲雷  
 の如く大曲村彈丸飛ひ逢ふて往來するを得す(此時四つ谷及  
 二番大隊のある檜岡にも戰鬪あり)硝煙は天を蔽ひ炮聲恰百  
 千の電の一度に落下るか如く其凄間敷と例るにものかし夜  
 に至り庄内より農兵二小隊來り加る此兵を合し必死を極め  
 て奮戦し官軍の一隊川に傍て近く進み來り服部隊の扣へた  
 る杉林に發炮すると夥し又一隊は新川西岸より石切山を下

服部純  
藏策を  
献す

秋田口

百八十八

り蛙川村を焼く竹内大作及松嶺勢は鳥部村より進て官軍の横合を炮撃すると雖も官軍次第に勢を増し夜十二時に至りし頃最も激戦味方終日の戦闘諸隊漸く疲る士小隊長服部純藏大隊長の前に來り謂て曰く熟々戦狀を視るに官軍は次第に人數を増し勢甚た鋭かり味方漸く疲る官軍の計夜の明るを待て突進せんとするあるへし果して去るとおらは味方何を以て之れを防ぐとを得ん不如夜陰に紛れて潜に二三小隊を進めて不意に花楢を襲ひ官軍の中堅を衝かは官軍必ず狼狽せん其機に乗て諸隊一齋に奮撃せば勝ちと必せり乞ふ之れを決せよと衆議皆之を然りとす依て石原藤助黒谷市郎の二小隊をして花楢を襲はしむ二小隊稻田の中を濳み石原隊は官軍の陣する傍ら近く忍ひ寄る黒谷隊の道を失して未だ至らず隊長藤助か手に属するもの僅に十余人藤助思へらは寡兵を以て直ちに發砲せば却て官軍の乘する所あらんと大

驚叱呼味方の鎗隊既に敵の脊後に回れり前列の砲隊疾く發せと呼ぶ聲の下より十余の小銃一齋に發せしかは官軍大に驚き負傷者救ひを乞ふの聲所々に聞ゆ轉して本道に駈出て再ひ一齋に發砲し官軍倍々狼狽大炮を引き逃る聲あり然れども寡兵敵中に入るを得ず依て藤助再ひ引返し敵崩れたり味方疾く進めと呼はりて自ら手鎗を振て花楢に突進して官軍の兵壹人を倒す部下の兵皆刀を振て飛入り殺傷最も多し續て味方大に至り散々に進撃せしかは官軍死傷無算硝薬軍器を棄て引退く今日の戦官軍の死傷甚た多きものゝ如くなるも其中首級を得たるもの左の如し

- 隊長石原藤助
- 隊下金野定藏
- 全 笹原鉄之助
- 全 太田平治

- 壹級
- 全
- 貳級 其一薩藩の郷士篠原正九郎とあり
- 壹級

秋田口

百八十九



秋田口

百九十

- 隊下土岐市助 壹級 薩藩島津小平太どあり
- 全 本間良之助 全
- 黒谷隊下三浦幸吉 全 薩藩長尾清左衛門どあり
- 全 菊地千吉 全 全田畑平九郎どあり
- 服部隊下今野源三郎 全 全川崎十左衛門どあり
- 全 星川増治 全
- 全 近藤直四郎 全
- 陶山隊下佐木伊助 全 全本庄午之助どあり
- 農兵留吉 全
- 生捕り 六人 内 壹人 薩藩日向總兵衛
- 遺棄の物品左の通り
- 一金千五百圓
- 一旗壹流
- 一七發銃 貳挺

- 一 彈藥千貳百發入
- 一 四百八十發入
- 一 元込彈五千三百發
- 一 ミ子ケル銃
- 一 彈藥六百四拾發入
- 一 全千貳百發入
- 一 電管五百個入
- 一 大小刀 數十腰

- 十七箱
- 二箱
- 貳拾六挺
- 一箱
- 同
- 六十個

八月廿

此日仙瀨の隊長瀬上主膳角の館の官軍を國見原に破る又二番大隊は斥候を出して官軍の動靜を視察せしむるに敵狀平日と異なる旨を報す午後一時を過くる頃一番大隊の方に當り大小の炮聲夥しく起り硝煙天を蔽ふて立登りしかは急に山頂に登りて之れを望めは花楸の方非常激戰の様を見る之れと同時に檜岡にも官軍寄來る諸隊急に人數を繰出し一の

秋田口

百九十一

關勢真前に進み之れに續くは酒井水野の諸隊とす大隊長は村の右方ある高阜山王の社地に陣して諸隊を督し官軍大に競ひ至る一の關勢と先う炮戰を始む一の關勢殆ど堪へ兼ねとすする勢あるを以て酒井隊急に之れに當り奮闘しと雖も官軍勢銳にして屈する色なく夜に至り官軍次第に人數を増し頗る激戰死傷あり味方甚た苦しむ東方漸く白らけり頃大隊長山王山の牙營より七星の大旗を押立て関を揚げて進撃せしかは味方之れに氣を得兵勢少しく振ふ大隊長昨夜竊に土工兵に隊旗を持たしめ諸隊の兵を分ちて背後より官軍の登りたる山に忍はしむ此時漸く登るを得背後より一齋に發砲すれば官軍大に驚き山を下りて退く諸隊之れに氣を得て大に進撃し官軍堪へ兼ね河を渡りて退く味方も渡りて追撃せんとするも官軍神宮寺嶽太平山及西岸の胸壁より頻りに發砲して進む能はず依て勝関を三呼して引返す四番大隊は二番

大隊と約せし如く大澤月山堂邊川より此方の官軍を撃たんと坂部上野長坂三矢の四小隊陳ヶ村を發し大澤に趣く半途二番大隊に於て大澤に放火するを見る依て坂部隊轉して強首村に至れば官軍既に引去るを以て火を放て引返す又海道口の味方は八月十七日三番大隊長酒井兵部龜田を發して官軍の屯在する長濱を襲ふの計を以て諸隊を部署し又四番大隊も同じく同所を發し明日三米鬼村に打入るへしと黒崎石原坂部の三小隊を權現村に陣せしむ此夜官軍川を渡りて新和村木爪澤村正手澤村を燒きて月山堂に退く之れ我兵を野營に苦めんと計あり同十八日三番大隊昨夜發せし諸隊堀山内平林紀田の四小隊は間道より羽根川村の先き高安山より長濱に炮撃し加藤柴田山崎關丹羽の五小隊は中道靈川村より峯を傳へ高安山の麓に進みたり大隊長酒井兵部は黒川一郎叶勇及龜田の兵抜卒ひて海邊より長濱に進撃し間道よ

り進みし諸隊降雨の爲め道を失ひ獨り堀の一小隊のみ羽根川に至り敵の箭火あるを以て火を取り所々に放火し閃々揚げて進撃し海岸の官軍此火光に驚き走る平林紀田の二小隊此火光に道を得て齋しく進む官軍頻りに發炮し其中東方漸く白く然れども霧深くして咫尺を辨せず互に炮聲を當てに發炮するのみ小隊長堀平太夫部下を指揮して頻りに進む忽ち丸に當りて斃る其他死傷あり隊長斃れしかば部下の兵大小動き戦極めて危し依て加藤隊進て之れを援ふ然れども官軍三面を備へ土を穿ち身が隠して炮撃せしかば味方甚だ苦戦し依て人を大隊長の營に使はして援を乞ふ則ち龜田藩の兵を遣はして之れを救はしむ小隊長山内寛之助又重傷を負ふて引退きしかば其隊亂れて引退く官軍機を得發炮する事頻りあり味方堪へ兼小山のある所に退き防く小隊長平林祐吉小山の前にあり然るに笠笠を着したる農夫休のもの顯れ

出て高安山の方に向て手招し之れを相圖に官軍小山の背に回る大隊長酒井兵部關耕之助をして戦の様を見せしむ然るに官軍既に我背後に回りしかば關直ちに卒る所の半隊を以て之れと炮戦し星川山崎叶の三小隊は海岸に向て進み發炮する所に官軍氣船を漕ぎ寄せ陸上に向て大炮を亂發し官軍倍々機に乘し競ひ來る味方甚だ危し茲に於て兵部令して戦を止む平林紀田の二小隊後殿して道川に引退く關は味方の炮聲次第に遠くあるを以て先づ隊を退かしめ自ら從者壹人と從へて引退くを敵四人に逢ふて殺さる四番大隊には坂部石原黒崎の三小隊は權現山を越て三米鬼を焼き上田古川の二小隊及龜田藩遠藤七左衛門の隊は新和の渡に備ふ白井上野の二小隊は綱木に陣す安藤一小隊は鈴木村に入り水野藤彌は新和村山に備へんと夜半に兵を進む坂部等三小隊は山路險を冒かして三米鬼に至れり官軍既に引退き兵糧雜具よ

り刀劔に至るまで棄て置く依て該村に放火す官軍川向より頻りに發炮し抑も此三米鬼村は仙北川に傍ふ所の村にして船亦くは彼岸に至る能はず而して官軍左手古の胸壁より頻りに發炮して進む能はず依て黒崎石原の二小隊長相議し上流繫村に轉せんとする所を坂部隊進み來り何ぞ炮丸を避けて間道を行の拙あらん唯た押し通せと大に衆を勵まし河岸の柳を楯にして進みしかは官軍の炮聲漸く衰ふ依て諸隊進て繫村に入る又古川上田鳥海三小隊及龜田藩の兵は新和の渡口にて向野の官軍と戦ひ古川六太郎傷を得て退く安藤隊は鈴木村に進て小種の官軍と川を隔て炮戦し時に朝比奈長十郎に属する清川村農兵八木助右衛門丸山彌吉安藤隊長の前に來り川を渡て小種に放火せんと乞ふ彈丸繁くして危険あるを以て之れを止むれども聞かす戸板に乗り川を渡り村内に忍ひ入り火を放ち敵の繫き置く船に乗り助右衛門は

歸る彌吉は川中より押流され官軍の備へし前に着く官軍彌吉を目掛て發炮すると夥し然れども彌吉億せず飛丸を冒して村中に入り火を放て歸り始め乗りし戸板に乗り川の中央に來る頃敵十人計り來りて彌吉に發炮し味方此方より頻りに發炮すれり敵引退く彌吉漸くにして歸るを得たり藤彌は新和山まで進みしも三米鬼の官軍川向に退きしかは白井上野二小隊及龜田藩兵と共に陣ヶ村に引返す同廿四日四番大隊川を渡らんと諸隊を鈴木村の谿谷に進む強首村より渡るへきを小隊長安藤定右衛門の謀を用ひて此所より小舟三艘を得て安藤隊先つ渡る次に白井隊渡る白井隊新田村に向ふ官軍在らす安藤隊小種に進撃し官軍不意に驚き逃げ去る味方進て該村を焼く官軍土淵村に軍を駐めて要地に依て頻りに發炮し味方畑に散兵して之れと戦ふ此時坂部九兵衛使を本營鈴木村に遣はし強首の官軍其人數を増し勢甚た銳なり

依て今朝川を渡る能はさりしと告く藤彌急に此由を安藤定右衛門に報し兵を返さしめんとす定右衛門其書を懐にして尙部卒を督勵し暫くして山上に忍ひ登りし味方官軍の左方に數十の小銃を一齋に發炮すれば官軍大に色めき小川を渡りて向野に引退く依て進て火を村中に放ち尙向野を進撃せんとせしも藤彌再三人を遣はして戦を止めしむるを以て引て歸る同廿五日一番大隊長松平甚三郎諸隊長を集め議して曰く花楸の戦味方全勝を得ると雖ども官軍要地に在て急に進む能はず此所に日を曠ふするは詮かし依て一の關勢を楢岡に止め二番大隊大曲に移り一番大隊四つ谷の淺瀬を涉り神宮寺の官軍攻撃たんか然らずは仙藩の兵と共に角の館を攻めんと衆議之を賛し依て長坂右近之助を二番大隊の營所楢岡に遣はして此事を議せしむ二番大隊長亦此議を賛す同廿六日二番大隊大曲に轉移す一の關勢は楢岡に滯陣す同廿

七日一番大隊及松山藩兵大曲を發し松倉の此方より川を涉らんとす中途にして東方既に白らちく依て策を變して角の館に趣き横堀の支郷國子町村に陣す二番大隊は大曲にありて兵發動す同廿八日一番大隊國子町村發し國見原に至り仙藩の兵と會す仙藩の兵先鋒して一番大隊之れも繼く仙野に進撃し仙藩早く戦を始む一番大隊斥候をして官軍の狀を窺はしむるに仙野の渡より川の上下壹里余の間山頂山腹に穴を穿ち守備極めて嚴かり貳人の斥候歸て此由を報し依て南方長野に松山藩の兵を置き石川加藤か隊及大砲隊は本道より進て仙野の渡に至りて發炮し官軍は角の館道を要して左右の山より發炮し終日戦ふと雖も官軍屈せず川を渡るを得ず長澤金剛隊石原黒谷旅河の三小隊を付して白岩を撃たしむ官軍要地にあり破る能はず味方死傷あり金剛思らく夜襲するに如かずと戦を止めんとす時に訛言あり官軍我背

八月廿三日  
九月三日  
八日  
九月  
十日  
十一日  
十二日  
十三日  
十四日  
十五日  
十六日  
十七日  
十八日  
十九日  
二十日  
二十一日  
二十二日  
二十三日  
二十四日  
二十五日  
二十六日  
二十七日  
二十八日  
二十九日  
三十日

秋田口

二百

を扼して其歸路汝絶ちと依て二番大隊急に米澤村に退きしかは大隊長金剛等の軍と收めしめ總軍米澤村に引上く同廿九日三番大隊と對する官軍進み來る味方各所に備へて應戦し官軍勝手澤と越へて山の半腹に登る安倍傳太夫澤前ある小山に出て、發砲しと雖も官軍多勢に乗して發砲し其彈雨の如く味方死傷あり黒川一郎道川に備へたるに官軍氣船と漕き寄せ大砲と發すると數發味方應砲し其彈一發官軍の船中に破烈せしかは氣船忽ち沖合ふ去る山の南に石原山中山崎の三小隊進く戦ふと雖も官軍負傷者と押除け新手と替へく進撃し其勢甚た鋭かり龜田藩の二小隊來く味方と援ふ暮お及く官軍勝手村又放火しく引退く然れども尙東山隊の官軍は終夜發砲し山の手ある茗ヶ澤黒瀬路觀音山にも官軍進撃し平林丹羽の二小隊之れお當る又黒瀬路お備へたる龜田藩兵おも官軍進撃戦ひ最も烈し互に逐追せらる紀太總藏は

茗ヶ瀬に備へたるに其半隊を山上に備へ自ら進て戦闘し黒瀬の味方既に引て茗ヶ野に火起る官軍機に乗し紀太隊に迫る總藏敵意人を斃し然れども戦甚た危し觀音山に備へたる平林祐吉之れを見て其半隊をして之れを援はしむ官軍終に引退く夜に入て諸隊各所に引て歸る此日互に死傷ありと雖も戦急にして双方首級を得る能はず此日四番大隊は繋より十余町西ある番屋村に番兵を置く官軍朝霧乘し川を渡りて番兵を襲ひ所々に放火して繋村入口に至りて関を揚く依て黒崎石原長澤三矢の諸隊急に出る、之れに當る然れども霧深くしく咫尺を辨せず唯た其砲聲を聞くのみ官軍急に川を渡りく引退く四番大隊長水野藤彌明日川を渡りて進撃せんと其部署を定む同卅日大風雨にしく川を渡るを得ず九月二日一番大隊大曲に陣と移し二番大隊と會同す同三日南部落一番大隊に使ひして生保内口の敗と告く此日三番大隊長酒

秋田口

二百一

井兵部職を免して庄内に歸るべきの命あり水野彌兵衛鹽越  
 村より來りて之れに代る同五日一二番大隊の諸將會し川を  
 涉て進撃の計を議し同六日中村次郎兵衛四番大隊の陣に來  
 り今度松宮源太夫四番大隊長命せられ三日庄内を發し今日  
 龜田に至るを以て主將水野藤彌參謀朝比奈長十郎龜田ふ來  
 れと告く同七日南部藩使を一番大隊に遣はして去月廿八日  
 生保内口を襲ひて火を放てり貴隊角の館を攻めて官軍の氣  
 勢を分たんとを乞ふと我之れに答ふ味方再ひ角の館を攻む  
 るも其志を得ず依て川を渡り荻和野神宮寺に進撃せんとす  
 二番大隊夜二時大曲を發し軍を潜めて太平山の麓を経て圓  
 行寺に軍し小花鈔兵衛四番大隊に使はし明日川茂涉るや  
 否茂問はしむ鈔兵衛四番大隊の陣營ある陳ヶ村に至り此由  
 茂陳ふ四番大隊長松宮源太夫は龜田にあり小隊長坂部九兵  
 衛飯攝し坂部曰く一昨日二番大隊ふ使ひしたる使者道茂失

仙臺に  
 井吉郎  
 仙臺戰  
 の本と  
 榎本等  
 次郎を  
 艦隊を  
 卒ひて  
 來るを  
 報す

して今日漸く歸り來れり殊に大隊長不在にして明日川を渡  
 る事決し難しを答ふ鈔兵衛曰く明日川を涉らすは諸方の進  
 撃皆相違し由々敷大事に至るやも計られず殊に宿軍此所に  
 兵を増さは川を涉る事能はざるに至るへし今日の計川を渡  
 るに如かすと云ふ坂部此計を然りとす此山を龜田にある大  
 隊長に急報して則ち川茂渡るに決し鈔兵衛夜に至りて圓行  
 寺の陣營に歸る此日仙臺に使したる自井吉郎書を裁して報  
 して曰く仙兵約くして駒ヶ峯の戰敗北し官軍既に界内に入  
 る榎本和泉守等軍艦六艘を卒ひて八月廿五日寒風澤に至る  
 も海上颶風に遇ひ損所を生し且つ兵士及兵器を載したる二  
 艘の氣船ハ其行く所を知らず又米藩は旗巻に出したる三小  
 隊を急に歸らしめ而して甘糟備後木滑要人を密に仙臺に遣  
 はし降伏の説を要路の重臣に説かしむるもの、如く事元よ  
 り秘密に属するも同盟諸藩大に此舉動を疑ふと報す同八日

未明一番大隊兵を新谷地花楸近傍に進めて馬鞍の官軍と炮戦し二番大隊圓行寺を發して兵を進む四番大隊人を二番大隊に遣はして川を渡る由を告ぐ二番大隊大澤に至りて糧を吃し木賣澤より鼓繰して川を渡る四番大隊は約の如く川を渡りて進撃せんと先づ石原數右衛門の一小隊を以て左手古の官軍を押しめんか爲め繫に駐め上田傳治兵衛隊及龜田藩の兵は向野の官軍を押へとして新和に備へしめ諸隊陳ヶ村茂發し間道より船七艘を以て上野織衛隊先づ渡る坂部九兵衛隊之れに繼ぐ上野隊は中小種村より右に折れ新田福部純の間道に進み坂部隊は左上小種の東より進て山の手に出つ黒崎與助白井總六郎安藤定右衛門又川と渡りて中小種を経川口に進む水野藤彌新田福部純の間ある原野に陣を敷く長坂雄彌三矢園治之れに繼ぐ先鋒ある上野隊上小種と福部純間に於て百余の兵發見る然れども之れ味方の先に進みしあ

らんと該兵に繼ぎて行く稍々近くに隨ひ味方の舉動にあらざるを以て暗弓を以て呼ぶ然るに彼大に驚き急に軍を返して發炮し或は抜刀して進み來る味方も兵を布列して炮戦し官軍我背後の山に登らんとするものゝ如し依て半隊長細井金右衛門手兵を卒ひて谷を繞り官軍の背後に出て發炮し此時長坂三矢か隊新田に放火して此所に來り相援けて烈しく發炮すれば官軍終に退く味方之れを追撃し官軍仙北川を右にして引退く坂部隊は東小種の左なる山頂に備へしかは此所遁れ難と思ひけん取て返し上野か隊に抜刀して斬り掛る味方も刀を抜き接戦數時に涉り終に福田藤吉郎あるもの隊長川井忠恕を斬て其首と采配を捕る其他官軍斬らるゝもの多く東方を指して逃去る坂部隊東小種の山を下りて進む所に官軍百余人銳氣凜として進み來る味方要所に兵を配して之れに當る官軍刀鎗を以て迫る味方連發之れを斃しと雖も



官軍屈せず其間五六間に迫る坂部隊態と左に避けて一方の血路を開く。官軍此所より川に傍て経路を走り去る味方高所にあり斜に兵を配して之れを狙撃し官軍討たるもの數を知らず此戦に於て坂部隊首を得る事拾四級其他屍の川に流れ沈むもの無算あり黒崎隊は中小種に進撃するに官軍あらず依て直ちに川口の向山に傍ふて進む官軍山上の胸壁より發炮する事夥し白井隊は之れに繼て進む官軍は又遙に川を隔て向野よりも發炮し其九雨の如く味方大に苦む白井隊死傷あり依て安藤隊之れを援はんと川口の南ある山を占め官軍の横合を撃ちと雖も官軍胸壁に據て固守し頻りに發炮し黒崎隊及白井隊は終に堪へ兼中小種に引退く敵壹人鎗を携へ味方の彈藥輸送夫に迫る終に其彈藥を取らる之れを見て白井か家來藤山鬼一其敵を炮殺して再ひ之れを取返す時に二番大隊木賣澤より川を渡りて福部純に向て押來りしかば

九月九日  
龜ヶ崎勢來る

四番大隊も之れと和して関を揚ぐ其聲山岳を動かす各所の官軍驚きて皆走る上野坂部安藤の三小隊は下淀川に進む水野藤彌は長坂三矢の二小隊を卒ひて之れに繼き火を放て攻め入る官軍あらず依て直ちに向野に進撃し官軍山上に備へて大小の炮を亂發し容易に破る能はず且薄暮に及ぶを以て引て下淀川村に陣す四番大隊長松宮源右衛門上小種より川口の此方草山に陣す此夜風雨電鳴甚たし同九日侯野市郎右衛門酒田町兵之れを絶ヶ崎隊と云ふ十三小隊を卒ひて陳ヶ村に至る

- |      |         |
|------|---------|
| 主將   | 侯野市郎右衛門 |
| 大炮隊長 | 朝岡主殿    |
| 小隊長  | 今泉善藏    |
| 全    | 全四十五人   |
| 全    | 全三十八人   |
|      | 井村 奥右衛門 |
|      | 多田 翁右衛門 |

秋田口

小隊長	卒三十八人	白井 彌五郎
農兵指揮	四十一人	松井 清三郎
全	五十四人	白井 寅之助
全	五十五人	松平 小一郎
町兵指揮	四十六人	下妻 孫兵衛
全	四十六人	村岡 重吉
全	四十七人	牧 角之進
全	四十八人	齋木 源四郎
全	五十三人	本間 數右衛門
參謀		中村 權太夫

外に往來使貳人輜重六人あり

二番大隊の參謀神部善十郎四番大隊の陣營に至り隊長松宮源太夫と謀議し二番大隊は明日堺より峯吉川新和野に進撃し四番大隊は今日向野に行きて兵を憩はしめ明日龜ヶ崎隊

二番隊と番隊  
と新橋川  
を攻め  
すん  
と議

九月二十  
一日  
淀川  
に上  
に戦  
ふ

と共棒川の新城を抜て直ちに久保田に攻入るへしと議定し  
 三好森兵衛石原敷右衛門中村次郎兵衛柴田雄藏及龜田藩の  
 兵を先發して種澤村に陣せしむ同十一日一番大隊大曲にあ  
 りしに新和野の方に當り火煙の起るを見る大隊長松平甚三  
 郎諸隊長を集めて議して曰く二番大隊既小川を渡るもの  
 如し然れども神宮寺の官軍未だ退かず二番大隊の此所に來  
 り道は開くを待ちば勞を人に譲るに當る依て此所に仙藩及  
 上の山松山藩の兵を止めて敵に當らしめ本隊は夜に乘じ鳥  
 邊より大澤に至り川を涉りて二番大隊と勞を分たんと衆之  
 れと然りとす二番大隊は下淀川を發し新和野を撃て上淀川  
 に至らんとす途の中里人の婦に逢ふ依て上淀川に官軍あり  
 や否を問ふ昨夜退きたりと答へ其舉動詐りにあらざるもの  
 如し味方上淀川村外の川を涉らんとするに川畔杉林の中  
 より一齋に發炮し味方大に驚き急に兵を配して炮戦稍々久

秋田口

し大隊長酒井吉之丞相良隊及竹内隊の軍役隊をして官軍の横と撃たしむ二小隊飛丸夜冒して川と涉り烈しく横合より撃ち官軍堪へ兼引退く味方進て上淀川及堺の兩村を焼き相良上田隊は船岡山まで進む此所小山重疊して官軍所々に兵を配して發炮し其牙營を知るに由なし味方急に前かる道に出てんとせしに官軍三小隊押來るに逢ふ其間僅に五六十間味方先つ發炮し官軍驚き退く依て進て船岡村茂燒く水野郷右衛門竹内右膳隊は本道より峯吉川に進む途中官軍の寄せ來るに逢ふ奮闘之れを退かし峯吉川に至る水野隊に於て島原藩士貳人を生捕る今朝下淀川を發したる矢口酒井の二小隊及一の關山形勢湯の澤村の官軍を撃ちへしと間道より進む小官軍あらず依て峯吉川に至る茲に於て二番大隊總軍此所に陣す水野郷右衛門寺内權藏と議し生捕たる島原藩士を無殘に殺しは益あし篤と利害説き今夜和野に忍はせ火を

島原藩の兵捕へ野和忍とて燒く村に

放たしめんと之れを貳人に説く貳人大に喜ふ依て之れを大隊長に告ぐ大隊長宮坂周造及土工兵仙右衛門をして之を助けしむ斯る所に又島原藩士壹人來りて降を乞ふものあり依て之を引て官軍の情を問ふ彼れ曰く西國諸藩は皆薩長の威力に恐れて出兵し真に戦ふの意あるにあらず島原藩の如きは元貴藩と親族あり元より戦ふの意あし而して官軍は毎戦敗を取り軍機振はずと答ふ依て又之れを加へ水野寺内隊先鋒し竹内酒井の二小隊は之れに繼く鳴を密めて前澤村を發し和野村に近付く官軍箒を焚き守衛甚だ嚴かり暫く扣へて火の起るを待ちも火起らず曉に近き頃和野村に火起る機に乗して一齋に進撃し官軍驚き走る島原藩士三人歸り來り(同人等翌年春に至り歸國せしむ)四番大隊には龜ヶ崎隊の隊長俣野市郎右衛門來り今日龜ヶ崎隊平尾鳥村に進み明日江戸街道より利島に進撃し四番隊は平尾鳥村より左に進て椿

の新城を抜くへしと議し四番大隊其部署を定め地理を巡見し斥候を出して官軍の動靜を窺ふ斥候三人平尾鳥の山上に於て官軍の斥候に逢ふ味方三人之れを追ふ歸て此由を石原數右衛門に告ぐ石原隊急に進む三好隊之に繼く山岳の重疊するを越ゆれば廣原にして其間に一の山嶽あり之れを糠塚山と云ふ此山最も要地あり依て石原隊此山に登る官軍來り争ふ三好隊東方より撃て之れを走らし大隊長松宮源太夫は組頭水野藤彌に白井總六郎大熊與太夫の二小隊を授けて明法寺村の官軍を破り椿の新堀を襲ひしめんとす藤彌斥候を出して官軍の動靜を窺はしむるに斥候歸り來り明法村より新城まで壹里内外ありと而して山上より望めは屋上にある人肉眼を以て見るを得且つ其備乏しきか如しと報す水野に付属する小隊長は直ちに新城に至り之れを襲はんと云ふも藤彌之れを拒て軍を進めす又黒崎助川庄司の諸隊を安養寺

九月十日  
大隊安養寺村に戦ふ

村に進ましめ上田一小隊を平尾村に止めて其後を守らしむ大隊長は坂部安藤長坂三矢柴田の諸隊を卒ひて糠塚山を隔て此方の山に陣す長坂三矢中村の三小隊及龜田藩の兵を進めて安養寺村を燒き尙進撃せんとす官軍椿の新城より援兵を出して之れを阻む彈丸甚た繁く龜田藩兵死するもの多し且つ地理不便にして味方進むに便からず黒崎石原二小隊と一つにあり炮戦すると數時小隊長黒崎與助丸に當りて重傷致負ひ平尾鳥村に引退く隊長討たれしかは其隊大に亂れ引退く此時大隊長各所の隊に使を馳せ休戦して適宜に軍を引き上へしと令す諸隊要地に陣を敷く然るに官軍遙に我右に軍を進るあり依て坂部安藤の二小隊をして之れに當らしむ官軍多勢にして甚だ精銳彈丸雨の如く戦最も急かり安藤隊は右の山に登り坂部隊と二方より烈しく發炮すれば官軍終に引退く坂部安藤隊之れを追撃し石原三好の二小隊は糠塚

山にありて炮戦數時に涉り味方死傷あり然れども要地に據て戦勉めしかは官軍漸く引退く續て山を降り之れを追はんとせしに官軍再ひ押來り左右に翼を張り進撃甚た急かり此時隊長俣野市郎右衛門上野今泉井村白井の四小隊を率ひて來り戦を援く味方大に振ふ官軍終に退く俣野は明日椿の新城を抜くへしと約して平尾鳥村に歸る此日助川彌總右衛門隊真先に椿川村に至り火を放ちたるに官軍城中より發炮し味方も進て戦ふと雖も日既に暮れ地理に通せず依て兵を收めて本營に歸る同十一日未明に四番大隊各所に兵を進めんとせしに官軍は一夜の中に胸壁を築くと南北一里余兵を配すると數重兵勢大に振ひ鼓練して進み來る石原三好の二小隊昨日登りたる糠塚山に登りて奮戦し味方死傷不少石原數右衛門は自ら隊旗を振て兵を勵ましと雖も官軍次第に加り彈丸霰の如く二小隊を以て支る能はず依て急に大隊長に援

椿城官  
軍守備  
甚た嚴  
かり

兵次乞ふと雖も折節各所に配して援ふべきの兵あり依て大隊長坂部安藤の二小隊を右方より官軍の横を撃たしむ二小隊進て鳥居山に登れば敵既に前山に備へて發炮すると夥たし炮煙の間より遙に彼方を望めは右の山道に佐竹の大隊を立て數百の兵嚴乎として扣へ殆ど破るへき策なきか如し然れども安藤隊最も進て炮戦し官軍は三方より之れを要撃し死傷少なからず且つ糠塚山の味方甚た危かりければ安藤隊引て坂部隊のある所に至り平尾鳥村に引上げんと云ふ坂部曰く此所退かは官軍大舉進み來り到底回復すると能はざらん急に軍を返すへしと安藤此言に復し再び兵を返して奮戦し坂部隊も死傷あり糠塚山に當りたる官軍は最も強く味方大に苦む大隊長上野の一小隊をして之れを援はしむ尙兵に乏しければ俣野隊に援兵を乞ふ然れども龜ヶ崎隊は江戸街道に於て炮戦最中赤れば兵を出しを得ず官軍倍々此所に集

九月十日  
一四番  
大龜ヶ  
及勢味  
川崎  
方苦戦

り四面より炮撃し味方死傷多く且つ疲れ終に山を降りて引退く官軍山を襲て兵を配し大隊長の在る所に向く烈しく發炮し大隊長奮激兵を指揮し戦はんとす危険甚た迫る味方此所は隊長の居る所にあらすにて數十間退かしめ大隊旗と立て諸隊其前面に兵と配して炮戦し數時にして俣野市郎右衛門龜ヶ崎隊十小隊と卒ひて援ひ來る糠塚山の官軍に對して兵を配し小隊長多田翁右衛門は右の山に登り横合より之れを撃たんとするも官軍既に山に満ち戦勝の勢甚た鋭し殊に陣取高所に取り發砲する以て味方の死傷甚た多く戦ひ殆ど疲る其中大砲隊長朝岡主殿大砲を卒ひて進み來り正面より山上の官軍に數十彈發炮し其中二彈は官軍の頭上に破烈せしかは官軍少しく氣を失ふものゝ如し又齋木源四郎は一小隊を卒ひて右の山に登り横合より烈しく打掛れば官軍大に屈し味方氣を得争ひ進む時に官軍の大兵新城より押來り

味方兵  
を退く

味方の三面を包て烈しく發砲し味方死傷頗る多く勢當るへからず大隊長松宮源太夫人を遣はして龜ヶ崎隊長俣野市郎右衛門に謀を問ふ俣野曰く官軍の狀を察するに銳氣少しく失ふものゝ如し今暫く忍堪して兵を進めは利あらん之れより鳥居山の兵をも進ましむへしと使歸て之を報す大隊長再び使を鳥居山の味方に使はさんとするも戦烈しくして至る能はず漸く潜み行きて此由を坂部安藤の諸隊長に告ぐ諸隊長曰く戦斯くの如し今漫りに兵を進めは味方の存亡計るべからず故に兵を進る能はずと答ふ使歸て此由を報す暮に及て龜ヶ崎隊の參謀中村權太夫來り戦未だ止まず夜に至らば味方甚た不利ならん依て之れより陳ヶ村に引て兵を休めんと大隊長之れを賛し則ち毎隊兵十人を殘し所々に箒を燒き偽兵を張り四番大隊先つ退く龜ヶ崎隊は二小隊を戦地に留めて總軍悉く平尾鳥村に引退き龜田藩より出し所の船三艘

を以て川を渡る坂部安藤に向て曰く味方の混乱斯の如し官軍若し大舉來らば味方總軍生て來るを得ず依て我等二小隊止て總軍を靜に渡さんと安藤之を賛し山上に兵を備へて官軍の尾撃に備ふ總軍を渡して後渡り退く四番大隊は陳ヶ村向野等に退く戦地に残りたる龜ヶ崎二小隊も官軍尾撃せざれば兵を纏めて引退く四番大隊の前助隊水野藤彌兵を動かさず暮に及て引退く獨り其付屬大熊與太夫隊進て平澤村を燒きて歸る二番大隊は夜討の味方引退くや直ちに兵を荏和野村に出し官軍畑に胸壁を築き又兵を田に伏して發炮すると甚た繁し先鋒の諸隊右方より川畔に進て横合より發炮し開山口の二小隊左山上の官軍を退かして其山を取る竹内は本道より上田相良は淀川口より進む官軍川畔の民家に據て發炮すると甚し大隊砲を發すると數彈官軍周章し又味方の土工兵は峯を傳へて官軍の背に出隊旗を山上に立つ之

れを見て官軍大に驚く味方勢に乘し進撃すると急かり官軍敗走し關隊直ちに荏和野村に至り火を放ち此戦や彼我の距離甚た迫り刀を抜て敵を斬るもの兩三人戦終て使を一番大隊に遣はし疾く兵を此所に進めよと告ぐ一番大隊早朝大曲を發し道を角間川畔に取る道路高低泥土深くして膝を沒し行歩甚た難し夜に至り漸く大澤村に至る三番大隊には各隊長相會し軍議して曰く安倍山中の二小隊高安山に登り松宮山崎毛呂の三小隊は神明山に登り黒川關龜田藩一小隊は本道より進み安倍隊長濱に火を放ちを相圖に急に進撃すへむ又加藤平林紀太の三小隊及龜田藩一小隊は茗ヶ澤より芽ヶ森の官軍を撃たは新屋の官軍必ず空しくして出て、援はん其機に乗して新屋を撃たは必ず勝たんと其向ふ所を定む同十二日二番大隊境村に進む一番大隊は神宮寺の官軍を拂はんと決す軍を荏和野に進め先づ三小隊を出して神宮寺の官

軍を撃たしむ夜に至り三小隊歸り北檜岡に官軍ある如し依て引歸ると陳ふ然れども村里の陳ふる所に依れば神宮寺の官軍既に退きたりと云ふも山上に火光あるを認む其眞僞詳ならず二番大隊は兵を峯吉川に駐めて進まず三番大隊は昨日部署したる如く安部傳太夫隊山に登るに先立つ官軍の守備を窺はんか爲め屈強の兵十人を撰で先に進ましむ果して番兵あり其壹人を斬り壹人を縛し官軍胸壁に據て篝火を焚き守衛怠らす然れども山下皆豆畑かれは其中を潜みて高安山に登り付属の池田吉兵衛を長濱村に忍はし火を放たしむ暫くして火起る傳太夫尙各隊に知らしめんと山上に炬火を揚ぐ之れを見て黒川村上の二小隊は急に進て發炮し官軍大に驚き殆ど窮するものゝ如し其中味方追々進み來り松山藩の隊長毛呂太郎太夫直ちに長濱に攻入て官軍を追ふ然れども官軍再び進み來り又船にて官軍の援兵至りしかは勢甚た盛

んあり毛呂は村外に出て頻りに部兵を指揮し戦ふ所に貳拾人計り不意に起り鎗銃を以て毛呂に迫る毛呂は聞ゆる聲劔家おれは先に進むを抜打に斬り倒し次に進むものゝ鎗の柄を切り直ちに之れを組み倒して其首を切らんとする所又壹人來り背後より毛呂を刺し毛呂終に死し隊長死せしかは隊下散々にあり退く官軍機に乗し進み來る黒川隊之れを見て馳來りしかは官軍亦退く安倍傳太夫は撰兵十人余と山を降ふて長濱に至り奮闘しと雖も官軍多勢ふ盛んふして少しも屈せされは安倍神明山に至り松宮源吾と會し援兵を出すへしと云ふ松宮則其半隊長三矢禎太郎に半隊を授けて之れを援はしむ三矢長濱に進みて發炮し此時に當り官軍長濱と海岸に充滿し當るへからざる勢おれは急に兵を纏めて引退く加藤隊は芽ヶ森に進みしに官軍要地に據て容易に抜く能はず平林紀太と計り其左右より横撃せしかは官軍少しく屈す



此機に乗し加藤紀太前面より烈しく進撃せしかは官軍終に引退く加藤紀太之れと追ふて番兵小屋を焼く丹羽は八田村より林中を潜みて山上に至るも官軍在らす依て轉して小山村に至り火を放ち水野彌兵衛も繼て至り川に傍て進む官軍小佐竹の城より川を隔て巨炮を發し彈繁くして進む能はず依て道を轉して芽ヶ森に至る此時長濱の味方皆引退きたるの報ありしかは此所のみ戦ふも詮あしと急に兵引退きたる官軍尾撃するも味方戦求めず夜に入て諸隊若ヶ野櫻澤等に引退く同十三日一番大隊神宮寺村へ進む先鋒より大曲にある松山藩兵既に川を渡り仙藩の兵と共に神宮寺より大曲に報す依て仙臺上の山藩の兵及竹内隊松山藩兵を神宮寺に残して諸隊荻和野村へ陣す且使を南部藩に使はして味方の川を渡るを以て南部藩再ひ大館へ進撃せん事を求む二番大隊峯吉川に陣す龜ヶ崎隊は中淀川に軍を駐む同十四日芳賀善

上の山藩使者  
一隊の番  
大に米に  
來り報  
藩官に  
降ると  
する

一隊の番  
大に米に  
來り報  
藩官に  
降ると  
する

兵衛上の山藩の使者玉造權左衛門と伴ひ一番大隊の陣する荻和野に來り米澤藩既に城ヲ開ひて官軍と迎へ又其指命ヲ奉して五百の兵ヲ發して會津と撃ち然れども奥羽の同盟に關するを以て尙に仙庄二藩に説て共に謝罪せん事を勸む弊藩も其勸めを受け福島に出したる兵は既に退かしめ又仙北の兵も急に引上くへしと令す而して此由と貴藩に通知すへしと寡君の命ありと陳ふ一番大隊長之れに答へて曰く我軍未だ其報を得ず然れども弊藩素とより禍を人に分ちを欲せず況や炮刃の下數月死生を共にする貴藩に於てをや他日兵を逆しまにして封境に臨むも時あり勢あり敢て恨る所にあらず人各社稷の爲にし弊藩の故を以て必ず大計を誤るとかかれと云ふ使者流涕して辞し去る之れより大隊長以下二三の隊長則ち二番大隊の營峯吉川に至り二番大隊長以下の諸將と議して曰く米澤既に降り同盟皆破れ西軍我境に迫る且

して收  
兵のと  
協議  
す

秋田口

二百二十四

暮にあり然るに封内之れに當るへきの兵あし西方海岸の守備又乏し今一舉して久保田を屠り軍を歸さんか官軍新米兵勢振ひ且つ寡を以て衆を打ちは一朝の事におらす如かず速に軍を返し四境を守らん而して時既に晩秋雪降らば山谷の行を絶ち官軍を防くに屈強かり明春天下の變を窺ひ更に兵茂出さは必ず勝を制する茂得ん若し變あければ天下の大兵に當り快く彈丸の中に斃るも遺憾とする所にあらず然れども明日一度進撃して官軍の強弱試んと議す依て急に進撃茂諸隊に令す四番大隊には官軍種澤に來るの報ありしかは坂部長坂三矢の三小隊と戸田澤に遣はして之れに備へしむ同十五日一番大隊上淀川に進て龜ヶ崎隊と一つになり共に境村茂撃たんとして行く途次牒者返り報す官軍昨日角の館より進て上淀川の上流荒川に陣しと依て先づ其官軍と撃たんと道茂轉して荒川に至る官軍あらず之れを村民小問へは

淀川の  
激戦

官軍昨日間道より境船岡小向て去ると云ふ其中山を隔て炮聲夥しく聞ゆ之れ龜田藩兵上淀川に於て戦ふ所あらんと急小服部石川松井の三小隊を遣はして之を援はしむ諸隊山お登り谷小降り漸くよして官軍の背後に出て関を揚げて發炮せしかは官軍驚き走る松井隊直ち小村よ入て火を放ち官軍鬱林の中お入て炮を發し味方數時戦ふ而して本道より龜ヶ崎隊の來るを待ち龜ヶ崎隊兵を進る途中上淀川と境村との間おて官軍の進み來るに逢ふ先鋒多田翁右衛門等進み戦ふと雖も官軍強くして破る能はず互に死傷あり暮に及て境村に火の起るを見る之れに依て多田衆を勵まし隊旗を以て真先に進む官軍退かず兩軍の間僅に迫る敵刀を抜て多田か腕を傷く多田左手を以て其敵を組敷く又敵來りて多田か背を打ち多田か家來其敵を斬り組敷く所の敵は味方高橋兼四郎斬殺し互に入り亂りて殺傷あり味方終に上淀川に引退く巖

秋田口

二百二十五

明日夜  
み乗し  
て總軍  
を返さ  
んとす

に一番大隊より遣したる石川等の三小隊龜ヶ崎隊の來るを待ちと雖も未だ來らず其中官軍の援兵関を揚げて寄せ來る其勢甚た鋭く接戦互に死傷あり然れども終日の戦勞れ堪る能はず夜十二時に至り荒川に引退く龜ヶ崎隊長俣野市郎右衛門一番大隊に使を使はし連日の戦兵勞る來り代んど一番大隊則ち兵を出して代る且つ議して曰く明日夜に入り官軍戦休まは窈ふ兵を纏めて軍を返さんと俣野之れも同意す二番大隊一番大隊も使を使はして諸藩の同盟既破れ官軍國境に迫るは近きにあるへし依て軍を返すへき旨を今日庄内に報せりと告く而して兵を峯吉川に憩ふ又人をして一番大隊及龜ヶ崎隊の戦況を見せしむ忽ちにして荻和野の方に當り炮煙大に起る急に斥候を出して之を見せしむるに一ノ關勢散々に撃破られ逃げ來るに逢ふ此日二番大隊長病あり依て小隊長竹内右膳代て軍を督し先づ水野寺内隊を先鋒として一の關勢を援はしむ小隊長酒井治郎右衛門部卒數人を卒ひて自ら斥候するに忽ち彈に當りて斃る竹内隊及同軍役隊繼て山の手と本道より進むと雖も官軍勝に乘し左山上より右川岸まで凡十八九町の間胸壁を築き兵を配して發砲すると夥し味方進む能はず時に寺内權藏官軍我後を襲はんとする如し急に兵を出すへしと云ふ依て山内三吉農兵を卒ひて進む所忽ち丸に當りて斃る依て相良鍋之助をして之れに代らしむると雖も農兵散乱残るもの僅十人内外なり諸隊死力を尽し戦ふ暮及て炮聲雷の如く山河爲めお動く夜も入りて官軍甚た銳を増し味方死傷多く且つ勞る然りと雖も戦倍々熾んおして夜明けく尙止まず大隊長病を援けく出陣し諸隊を勵まして曰く昨日境に於て一番大隊死傷多し今又一ノ關勢敗れて荻和野にある一番大隊の彈藥悉く失ふ且つ前後道絶へ我隊の糧食明日一日を余しのみ万死の中に一生を

二番大隊長諸  
隊長を諸  
告く

得るは正に此一戦にありと茲に於て諸隊大に振ふて力戦す  
ると雖も官軍強くして屈せず參謀神戸善十郎先鋒の寺内權  
藏に耳語し寺内腰間より采を取り之を振て曰く味方彈藥既  
に尽く拔刀官軍の胸壁に斬り入るへしと眞先に駆く一隊の  
卒續て駆行く之れと同時に大隊長の旗下に於てラツバを高  
く吹鳴らす大炮數十彈連發せしかは竹内矢口上田の隊九を  
冒して胸壁に駆行く官軍堪へ兼隊長手旗を振て其隊を纏め  
靜に引て角の館道に引退く依て二番大隊菊和野に陣す而し  
て諸隊長を集めて云て曰く米藩官軍に降り奥羽の同盟既に  
破る實に國家安危の時あり軍を返しの命あすと雖も彈藥を  
除く外輜重を悉く焼き人々三五日の糧を腰にし晝夜兼行し  
て國に歸り存亡を國と共にすへし此事既に一番大隊と協議  
せり依て今夜十二時に發せん期を過るあかれと衆愕然たり  
大隊長則ち馬に鞭て一番大隊の營に至り事を議して歸る茲

山形藩  
使を大  
番に隊  
に使は  
し使は  
兵の收  
を告ぐ

に至り各所の隊皆集りて一番大隊の來るを待ち此日一番大  
隊峯の山に於て龜ヶ崎隊と代り炮戦し小隊長石原藤助丸に  
當りて傷を受く此戦午前十時に始め午後八時に漸く終る其  
間最も激戦互に死傷あり又山形藩使を一番大隊に遣はして  
收兵の事を告ぐ其主旨上の山藩の云ふ所と異なるも我又上  
の山藩に答る如くにす同十一日一番大隊夜に入て籐を所々  
に焚き偽兵を張り峯吉川を發して菊和野に退き二番大隊と  
共に神宮寺に至れば東方漸く白し此日龜ヶ崎隊は上淀川の  
戦を一番大隊に譲り中淀川に退き牧角之進をして下淀川に  
備へしめ主將侯野は四番大隊の陣營向野に至りて事を議し  
時に下淀川に官軍寄せ來る依て今泉隊往て牧と共に防く其  
中又中淀川にも來りと告ぐ味方不意に撃たれ混乱制する能  
はず終に兵を纏めて下淀川に引退く同十七日一二番大隊神  
宮寺に至り仙藩の隊長に面し收兵の故を告ぐ馬鞍を過ぎ玉

味方收 兵の途 玉川を 渉る 武藤半 藏外二 名に謝 罪状を 齎らし 齎に米 澤を頼 藩に周 旋を頼

秋田口

川に至る船僅に三四艘あるのみ竹内大作後殿して敵の尾撃に備へ二番大隊先きに渡り一番大隊繼て渡る其夜横手に引退く四番大隊は向野を引て龜田に退く此日庄内に於て武藤半藏中世古才藏吉野の雄平をして謝罪状を齎らし米澤藩に遣はし其周旋を依頼し其書状左の通りあり  
臣忠篤恐惶頓首奉歎願候抑も家督以來世上不穩に属し主家徳川氏より江戸取締厚く被委任小藩元より可行屈儀に無御座候得共澆季の場合主家奉職の王土至靜に歸し候得は勤王之端末と奉存乍不及盡力罷在候所正月以來之事件は實に恐懼至極に奉存候尤も勤王之儀は少しも危略不仕心得罷在早速爲伺 天機重役上京申付候所御不審被爲在候趣にて途中より御指戻し相成候に付尙仙府へ御下向之御鎮撫總督府へ歎訴之爲重役指上候所是又御指戻に相成臣之嚴謹可奉伺様無御座恐悚至極罷在候折柄登京之儀

御沙汰を蒙り先詰之者草津驛まで罷登り候所是又入京御指留よて罷歸り實小進退相谷候仕合小御座候臣乍不肖元より官軍に抗し候意念は毛頭無御座候得共兼て指揮不行届且つ遠路僻地に罷在候得は今春以來之事情形勢も不奉伺家來共於出先に奉抗 王師終に今日の形勢に立至り候段先非悔悟重に奉恐縮勤王之外他志無御座候就ては城外に謹慎恭順罷在家來末々まで嚴重謹慎申付奉仰天裁候此上闔藩精々勉勵奉表勤王之實効顯し度至願に御座候間未だ降伏謝罪不仕藩へ先鋒被仰付被成下候は、冥加至極難有奉存候仰き願は何卒臣微衷御憐察被成下當春以來蒙御不審候所幾重にも御寛典之御沙汰被成下候様冒万死不憚忌諱奉歎願候誠惶々々頓首々々

同十八日一二番大隊横手を發し新庄に入らんとす會々新庄に官軍在り院内の嶮を塞くと聞く依て道を轉して一番大隊

秋田口

は大澤より矢島に至り三崎を越して吹浦に入り二番大隊は田代越より百宅を経て舛田に退くに決す四番大隊は龜田に退き龜ヶ崎隊は陳ヶ村より本庄に退く此時小室源四郎遠藤増右衛門庄内より來りて軍を返すへきの命を傳ふ四番大隊長松宮源太夫急に此旨を三番大隊に通知せり而して四番大隊長龜田藩に告げて曰く事既に今日に至る貴藩の安危も亦旦夕にあるへし秋田藩に属して國家の安全を計らるゝも敢て非ありとせず我か兵は是より國に歸らん爰を以て辞すと龜田藩答へて曰く寡君既に尊藩にあり且つ藩論一定して尊藩に属し豈安危を以て再ひ背くへけんや願くは閩藩庄内に越きて寡君と存亡と共にせんと此日謝罪狀を携へたる三使船形に至る米藩神保乙平の來るに逢ひ事を議して相共に名木澤に宿す同十九日三番大隊金の浦に退き四番大隊本庄に退く此時我彈藥本庄の市街にあるもの山の如し市民我軍の

庄内より  
り總軍  
返すへ  
きを令  
す

中村次郎兵衛  
市本庄の  
叱す民を  
龜田藩  
士の婦  
女子等  
落來る

米澤藩  
使武藤  
半藏等  
の謝罪  
の事を  
議す大  
綱口三  
官軍の  
謀に而  
す

退く我見て之れ我輸送するものなし殆ど困し中村次郎兵衛大聲呼て曰く輸送者あきに於ては之れ我燒毀するに如かす疾く火我掛けよと云ふ之れ我聞き市民大に驚き忽ち人夫我出して之れ我輸送し龜田藩は老幼婦女我助け鎗大刀我杖にし或は家財我負ひ十里の海岸陸續として數々郷里と顧み無慮の情と忍て行歩する様其情想像するに余りあり同廿日二番大隊百宅の嶮を越へ封内飽海郡舛田に入る三四大隊及龜ヶ崎隊は皆吹浦に退き要地に兵を配し同廿一日一番大隊矢島より封内飽海郡吹浦に入る此日米藩の士千坂太郎左衛門大瀧新藏高鍋藩岩村虎雄謝罪三使の旅宿に來りて謝罪に關する事件を議す同廿二日三使新藏虎雄に伴はれ海沙に至り大綱口に向ひし官軍の參謀某氏に謝罪狀の副本を呈し參謀曰く庄内越後筋關川破れて國既に危急に迫る事速あるに利あり願書は長文を要せず此副本は直ちに諸口の參謀に回す

吉野參謀  
平田了謀  
黒田了謀  
介と面  
議す

へしと陳ふ依て武藤中世古は六十里越を経て庄内に歸る最  
も米藩神保乙平同道し吉野は虎雄と共々夜半大石田に至り  
參謀黒田了介お謝罪の使として來る旨を通し翌廿三日未明  
お米藩士大瀧及高鍋藩士岩村と兩人先づ參謀を面し庄内謝  
罪の旨を詳陳す參謀曰く該使を米澤藩の陣營に留置くべし  
今軍を進むる所ありとて直ちに船に乗して最上川を下る依  
て岩村と米澤に歸り吉野と大瀧と共に後を追て清水驛に至  
り大瀧直ちに該地に於て參謀に面し謝罪の事實を陳述して  
甚た勉む參謀曰く然らば本夜該使に面して征討の主旨をも  
申聞かすへしと云ふ依て大瀧退き吉野と其時刻の至るを待  
ち其中參謀謝罪の使者に面せんと通知あり吉野急に該陣營  
に趣く先づ名刺を通し參謀左右人を退け吉野を一室に請し  
吉野曰く昨日米藩士大瀧をして歎願仕る通り庄内の謝罪降  
服御許容の程厚く懇願仕る所あり尤も謝罪の願書は只今落  
掌相成るべく哉と云ふ參謀曰く昨日大瀧を以て歎願の儀は  
略承知せり該願出の副本をも閱せり然れども該願書は今落  
手するを得ず其故は第一謝罪は藩論一定せし上ありやと問  
ふ吉野曰く元より一定せし上歎願する所ありと答ふ參謀曰  
く既に藩論一定して謝罪する儀からは何故清川口に守兵を  
置くかと問ふ吉野曰く其儀は謝罪許可の有無計り難し其中  
僅に兵を置きて國境を警戒する所あり今謝罪許容せらるゝ  
あらは直ちに兵を撤せんと答ふ參謀曰く王師の向ふ所抗す  
るものあるは兵威の弱きに依るあり了介大總督の命を受け  
不服を征討するに於ては一日も途上に滞留すへからず貴藩  
の謝罪等に係る所にあらず然りと雖も實効を顯はして  
謝罪するに於ては其旨を大總督府お達せん當時謝罪の實効  
とするものは一番の兵器を出して開城するにあり若し此兩  
條を實行して謝罪せらるゝ儀ならん今此所み於て其期を約

せん既小藩論一定せし以上は遅々する譯ふあらずと云ふ吉野曰く明日より二日間又實効を立て國境の守兵を撤し王師を迎へ奉るへしと答ふ參謀曰く明日より二日間にては或は事の齟齬するとあさも保せず依て一日を加へて明日より三日間と約せん之れを諾するに於ては其旨記載すへしと云ふ依て左の草案を參謀に示す

今度謝罪降服仕候上は明廿四日より三日の内兵器不殘差出し開城可仕諸口の人數引入諸藩脱走の者は夫々一國に致し番人を付置申すべく候

參謀之れを閱して宜しと云ふ續て曰く然らば願書も領掌し速に大總督府に上達すへし沙汰次第取計ふへしと雖も社稷血食は疑ふへからず而して今斯く約せし上は若し其期を違ふとあらは君の罪免るゝ所あからん若し三日の間官軍より發炮致し等のとあらは了介其罪を受くへし尤も某壹人君と

開城

參謀黒田了介  
庄内に入る

同船して貴藩に入るは如何と云ふ吉野大に驚き謝罪の願書領掌せられたる事實未だ藩に通せず國中疑懼の余り万一事起るあらは獨り參謀のみにあらず弊藩大に罪を増しに至る依て同船せらるゝ儀は止められんことを望むと再三之れを止む依て吉野は大瀧と共に直ちに船にて庄内に歸る同廿四日午後に至り吉野漸く鶴岡に達し直ちに登城して參謀と問答の顛末を言上し翌廿六日藩主忠篤公城を出て、寺院に謹鎮し又脱藩の士は市外に移して之れを警衛し國境各所に急使を走らして守備を撤せしむ其混雜非常なり而して家老水野藤彌及び山岸嘉右衛門を急に清水村に使はして王師を迎へんとするお參謀既お古口村來れり水野等至るに及て單船に乗して獨り庄内に入る嘉右衛門のみ漸く隨ひ入るを得たり同廿七日諸方の官軍庄内に入る參謀城内に入て城地授受の式了る官軍滞鶴すると三週余日其間諸官衛は勿論門伐の



家屋及衆人を入るに足るへき家屋は大略藩廳に於て借上げ之れに寄寓せしむ又藩廳を大督寺に移して事務を理し其混亂實に名狀すへからざるものあり而して官軍順漸歸途に就く然れども其中數小隊を大山村に置き尙鎮撫に従事せしむ同年秋日不明化言あり庄内藩既に降服を爲し兵器皆納付すると雖も尙竊に之を藏するもの、如し依て大山鎮撫の官軍鶴岡に至り家宅を搜索し該兵器藏するものあらは之れを差押へ其狀況に依り藩主の大事にも及はんかど、寄々相通し其中親族知友等來り會し官軍既に鶴岡に入り今某町を搜索し兵器數種を差押へたりと傳ふ斯くの如き事あるに於ては一藩の休戚に關るを以て互に急度心得へき事ありかど、注意するものもあり當時士族部内に尙多くの兵器彈藥を藏するを以て大に之れに苦しみ土中に埋むるあり或は川中に投するあり種々の方法を以て之れを藏匿し當時余歳僅に十二

り  
化言

歳父に隨て之れを藏匿せんか爲め夜竊に新形村所有地に至り作藪の間を深く掘り銃炮彈藥を箱に納めて埋没し其復往の途次同じく藏匿せんか爲め兵器を持出しもの陸續として絶へす後其事實を聞くに重く無根の説なりと此時彈藥の水中に投棄して再び用ゆへからざるに至りしもの其幾何なりや知るへからず大山鎮撫の官軍は歳を越して該所を引拂ふに至る藩主忠篤公は東京に召喚せられ某所に閉居勤慎仰せ出され後忠篤公の弟君なる忠實公に封土十七万八千石の所削封せられて拾貳万石を賜ふて家督を仰出され事落着す

家老石原倉右衛門官軍の伏兵に殺さる

七月廿四日越後口に於ては出張の諸將會米の諸將と議し日の浦中村に備る味方東備後峠西乙茂の官軍に苦られ兵勢振はす依て村田妙法寺の後山に胸壁を築て乙茂の官軍に對せんと議し榊原十兵衛大砲隊を卒ひて夜半該所に忍ひ入りて胸壁を築く官軍之れを知らず同廿五日會藩の兵と共に該胸壁に據て官軍と戦ふ乙茂久田の官軍大に之れに苦む此日家老石原倉右衛門仙米諸藩の重臣と新潟に會し庄内に歸るの途次沼垂に於て官軍に逢ひ斬殺せらる同廿六日新發田藩盟に背き松ヶ崎より官軍を上陸せしめ水原邊に放火し其勢甚た熾かりと島崎の陣營に報す其夜三更官軍土屋新三郎か陣せし治曆寺に襲ひ至る味方會藩の兵と共に之れを走らし同廿八日主將石原多門會津米澤長岡桑名の各藩諸將と會し新發田藩盟に背き官軍を引入れしかは進て之れを撃たんか又

七月廿八日三條に退く

援兵を村上藩に遣はす

退て着後の策を講せんかと議し會桑の隊長頻りに進撃を希望しと雖も米藩の隊長之れを賛せざるより各藩の隊長皆憤怒を懷て三條に引揚ぐ我軍村上藩の諸將と謀りて八十里越の要地鹿峠森町二ヶ所に備ると二晝夜村上藩の兵は見付に備ると雖も衆寡敵せず殊に同盟諸藩の兵皆潰走して三條甚た危し依て總軍加茂より會津封内なる津川に退く村上藩危急に迫りしかは援兵を乞ふと頻りなり依て七月廿九日左の隊を援兵として村上藩に遣じ  
主將 酒井正太郎  
番頭拾五人を卒ふ又從者九拾八人  
一天砲隊 壹隊  
一往來使 二人  
一輜重司 壹人  
此日村上に至り直ちに城に入る又津川に引揚けたる兵は米

澤を経て庄内に歸る獨り中村七郎右衛門が卒る四小隊は仙米藩の請に依て桑名藩の兵と共に山形より引返して福島に赴く八月六日中村次郎兵衛最上農兵百人を卒ひて越後黒川に來り其夜米藩の諸將と謀り中條の官軍を討たんと夜十二時兵を進む大に官軍を破り首を得る事六級身傷を受く米藩約に違ふて兵を進めされは深く敵中に入るを得ず軽く兵を引て村上に歸る八月十一日昨日鹽ノ町に退きし酒井正太郎諸將を會して尙村上を救ふべきや否を謀議し其中遙村上の方に當り煙焰天に漲るを見る依て急に兵を進む途中村上藩の重臣鳥居平十郎内藤幸吉郎に逢ふ彼曰く官軍迫ると急あり依て城を焼き老幼相携へ庄内に落行く所ありと依て共に兵を引て封内に入り小鍋高畑等の要地を守る此由鶴岡に急報す之より先き炮術家中村三内をして海防の整否を視察せしむ三内越後の界ある鼠ヶ關に至り大に胸壁炮臺を築く此

村上城  
落る

日蒸船一艘鼠ヶ關港に寄して發砲すると六七彈村民大に怖る三内該村の守吏四名及農兵を指揮して之れを防く該船越後沖に向て去る暮に及て中村次兵衛が弟平藏外貳名兄が卒る最上農兵を卒ひて小鍋より來り會す八月十六日林茂助白井爲右衛門萱野正助新徴隊三小隊を卒ひて鶴岡より小鍋に來り守る此時小鍋高畑守備の人数左の如し

主將

酒井 正太郎

其他左に

- |       |     |        |
|-------|-----|--------|
| 新徴隊   | 三小隊 | 一隊五十人  |
| 卒     | 一小隊 | 六十人    |
| 町兵    | 二小隊 | 壹隊五十人  |
| 農兵    | 二小隊 | 壹隊七十五人 |
| 村上藩の兵 | 十五人 |        |

八月十七日官軍村上城を攻落し中村に至ると報し依て石澤

越後口

清兵衛か一小隊及旅河市兵衛柳原十兵衛か二小隊中村三内に属する所の一小隊も封境鼠ヶ關村の向ある鼠喰岩の海岸及山上を守る而して諸隊石澤清兵衛か指揮を受くべき旨を命す同十八日細井周藏農兵一小隊を卒ひて鼠ヶ關に至る同廿二日の夜原海村の番兵來り大川村より中濱邊まで官軍の炬火多く見ゆる旨を報す石澤清兵衛中村三内村外に至り望めは山上山下炬火夥し其狀胸壁を築くものゝ如し依て清兵衛等相議し今夜大川村に進撃し其胸壁を壊ち官軍の銳を挫くに如かずと夜十二時一同大川村に進む清兵衛中濱村に至り里人を呼て官軍の狀を聞く里人曰く官軍五六十人大川村にあり近村に炬火を焚くべき旨令ありと陳ふ依て味方海岸山道二手に分れ海岸よりは赤井修二中村省藏旅川市兵衛石澤清兵衛中村三内之れに繼く山手は中村平藏井黒末吉とす途上修二か隊官軍の斥候と逢ひ逃るを追て岩崎村に至れば

官軍怠らず川南の海岸より頻りに發炮せしかは味方應炮して岩崎村に押し入る然れども暗さは暗し地理に通せず兵を進退すへくなく依て火を民家に放ち火光を以て兵を村外の山に進めて發炮し此時山の手より押出し味方大川村上の淺瀬を涉りて村中に火を放ち奮闘せしかは官軍堪兼退く依て官軍の駐在すべき岩崎村及塔の下村大谷村堀の内村を焼き未明に鼠ヶ關に軍を返す同廿二日氣船壹艘鼠ヶ關沖に來り陸を距十八九町にして大炮を發する事再三夫より轉して沿海早田岩川加茂湯の濱等の村々に發炮し終に秋田沖に至る同廿五日石原多門鼠ヶ關の主將として本田源三郎か一小隊を卒ひて出張す同廿六日大川村の方に當り炮聲聞ゆ依て中村三内村外に出て、望めは官軍數百人押來れり急に之れを諸隊に告く味方石澤細井赤井の諸隊及村上藩の兵其他農兵等鼠喰岩と小田坂の間に備ふ又中村省藏は赤坂山中村平藏

はツン越中村三内旅川市兵衛は小鍋道に備ふ斯る所に官軍  
 大久保山に登るの報あり旅川隊山上に至りて之れを防く官  
 軍引退く石澤隊は鼠喰岩に於て炮戦せしに主將より急使あ  
 り小田坂の農兵既に敗れんとす越さ援ふへしと石澤隊轉し  
 て之れを援ふ其中又官軍峯を越へ進撃すると告ぐるあり清  
 兵衛隊を卒ひて山上に登れば中村省三既に戦勝て葵の紋と  
 興の紋を置きたる雨掛と彈藥箱二個を分捕り置けり此日官  
 軍此所を押破らんと決せしものゝ如く新手を入替へ屈せず  
 捷ます其勢甚た鋭かり味方代るへき兵なければ夜に至り諸  
 隊大に疲る依て諸隊長相議し官軍の背後ある中濱村を焼き  
 其機に乗して進撃するに如かすと忍ひ入るへき者を撰ふ興  
 屋村音吉あるもの行かんと乞ふ依て之れを忍はし暫くして  
 火起る折節海風烈しかりければ猛火天を焦し如く官軍驚き  
 て之を顧み味方機に乗して烈しく發炮せしかは官軍堪へ兼

中濱村  
を焼く

終に引退く此日小鍋にも官軍進撃したり本道堀切峠には喜  
 曾文藏山下市郎兵衛中村百度加藤常三郎手兵廿三人農兵五  
 十人あり左中の峯には末松一學秋保與五郎石原多次馬中田  
 鉄五郎大場宇兵衛手兵四十人なり左村上山には朝比奈十郎  
 大島治郎及村上藩の兵あり正午頃に至り小俣村より五六丁  
 此方に人數を進めて發炮せしかは小鍋村より和田藤藏新徴  
 隊半隊を卒ひて中の峯に出で一の胸壁に據て炮戦し官軍は  
 小山の崎に兵を布て發炮し又本道よりも大小の銃頻りに打  
 出し又村上山よりも發炮すると雖官軍本道の右ある日本國  
 山の半腹に登りて中の峯なる胸壁に横合より發炮し時に林  
 茂助も新徴半隊を卒ひて中の峯に來り小山の官軍と炮戦し  
 味方寡兵甚た苦しむ死傷あり朝比奈長十郎村上藩の隊長本  
 村主殿と共に左の峯ある官軍を追下さんと越く所を官軍村  
 上山に大小の炮を据へ頻りに彈射せしかは農兵堪へ兼引退

く町兵指揮佐藤又之進阿部平馬町野源治等間道より進て日本國山ある官軍を追ひ下け官軍の屯する小俣を襲はんとす林茂助は本道より進み白井爲右衛門も新徴半隊を卒ひて堀切峠より日本國山に進撃せしかは官軍堪へず引退く巖に村上山の左に回りたる朝比奈木村は森林の中を潜て官軍に近付き不意に炮發せし官軍驚き山を降りて小俣の方に引退く依て佐藤阿部町野の兵と共に横合より中の峯の官軍に頻りに發炮するも官軍少しも屈せず奮闘し此時官軍一小隊計り小俣村口稻荷山下に兵を布くを見るや中の峯の官軍急に山を下りて引退く之れを見て味方敵は逃くると呼はり勢に乗して一齋に進撃せしかは官軍悉く小俣を指して引退く稻荷山下の官軍は山際の樹木を楯に取り烈しく發砲せしも中峰の官軍引退しを見て俄に發砲を止めて引退く味方の總軍暮に及て小鍋村に引退く又間道高畑口に備へたる小隊長本多

元太半隊を卒ひて岩石村邊を斥候せしに村中寂として官軍の影見されは所々に放火して歸らんとせし所を官軍不意に起て一齋に打掛る味方も發砲して相戦互に死傷あり然れども味方元より斥候に出てたるおれは携る所の彈藥既に尽き散々になりて引退く此時萱野正助一小隊を卒ひて高畑に打登り胸壁を築く所に官軍不意に起りて出崎山の西方より烈しく發砲し正助則ち岩石村の間道に備へて應砲し赤澤源彌は出崎山の頂にありて之れと戦ふたり官軍追々進み來り其間十間計りなるも樹木鬱茂して其人を見る能はず其中官軍壺人進み來るを味方之れを砲殺し勢に乗して進撃すれば官軍終りに引退く同廿八日村上藩の重臣鳥井三十郎隊長島田丹治百余人の兵を卒ひて鼠ヶ關の守衛に加る此日關川守衛の兵山熊田の胸壁を撃破し是より先き土屋新三郎一小隊(廿九人)及鳥海新之助小澤武三郎(水夫四十人)小竹寅之助藤井武之

大鳥村  
放火せ  
らる

越後口

二百五十

悉村上藩柴田茂左衛門一小隊を卒ひて關川と電との間に胸壁を築く官軍密に兵を封内大鳥村に派して該村を焼く依て山熊田空虚なり之れに乗して之れを襲はんと先づ土屋は一小隊(農兵五十人)を卒ひて山の左より道なきを押分け官軍の背後に出ち又村上藩十五人は右の山より潛み進む小澤は水夫十五人を卒ひて土屋に續て進む時に夜二時なり官軍の胸壁近く進み寄り山上に登りて夜の明るを待ち土屋は半隊長井上雄介を鳥海と共に止め官軍の援兵を遮らしめ自ら半隊を卒ひて山を下り胸壁に進むも峻坂屈曲樹繁くして人の有無を辨せず僅にして官軍の番兵ある所に至る番兵驚て逃る狙撃すれども當らす土屋奮て胸壁に至れば僅十間余にして二重に胸壁あり官軍驚き出て、發砲し味方競ひ進むと雖も足場悪く速に進むを得ず暫時砲戦し互に死傷あり土屋は官軍の後詰來らさる中に胸壁を乗取るへしと頻りに兵を奮ま

し自ら真先に進て敵壹人を斬る此機に乗し味方突進して官軍數人を斃し此砲聲を聞き村上藩及小澤隊齎しく起て發砲すれば官軍堪へず引退く又山に残りし土屋か半隊及鳥海隊に山熊田の官軍百人計り寄來りしも皆打て之れを退かす土屋隊と一つになど山熊田の胸壁を毀壞して關川村に歸る九月一日未明官軍海陸より鼠ヶ關に押來る石澤中村隊急に大久保山に進む官軍既に山上にあり藪林に身を隠し烈しく發砲し石澤中村戦甚た苦む主將石原多門則ち中村三内か半隊我遣はして之れを援はしむ然りと雖も尙危し依て三内急に藪林の中を潛て山の半腹に至り遙に隊旗を振て石原隊に知らしむ其中中村省三隊五六人村上藩の兵七八人來加り總勢卅余人を得三内之れを卒ひて官軍の潛みたる藪林の中に頻りに發砲し石澤隊も之れに機を得て烈しく打出せば官軍終に堪へ兼退く海岸の官軍は凡千人計り味方の胸壁を乗り取

越後口

二百五十一

らんと進撃する事甚た急にして其距離凡三四十間あり其他官軍山の腰を回りて進み来るあり戦甚た危し然れども味方要地に據て死守せしかは官軍終に引退く此日官軍の首級六級を得此日高畑口にも官軍押来りしも忽ちにして引退く九月二日廣木安右衛門酒田町兵四十八人を卒ひ又春山鉄之助他海郡農兵五十人を卒ひて小鍋に來りて守衛す同五日加藤久三郎大沼總助加藤保治他海郡農兵百五十人を率ひて小鍋村に來り新徴隊に屬す九月十二日關川村燒かる始め八月廿八日味方山熊田に進撃して胸壁を壊ちしより官軍の動靜を窺ふ九月九日謀者歸り來り山熊田の官軍引退くと告ぐ依て今朝土屋新三郎部下十九人を卒ひて自ら小鍋口澤下の胸壁を番兵し又藤武之丞は水夫十五人を卒ひく雷に趣く新三郎官軍の動靜を見んと十五人を卒て雷に至り付て山熊田に趣く途次彼所此所に兩三名の兵あるを見る依て人を關川に

關川燒  
かる

遣はし援兵を出すへしと言はしむ關川に於ては小竹虎之助を出し村外の胸壁には關川村の農兵を置き官軍來らば貝を鳴らしへしと令す新三郎尙も進まんとする所に官軍俄に起り一齋に發砲せしかは新三郎急に雷に返す尾形三郎右衛門に向て曰く今日官軍の狀を察するに我を進撃するものゝ如し必ず此所に限るにあらず澤下の胸壁最も要地あれば之れを守るへし又關川にも人を遣はして守備を嚴にすへしと令す三郎右衛門直ちに關川村に歸る途中村民馳せ來り今官軍多勢押來ると報す依て之れを澤下の胸壁に告げしむ其内官軍關川に迫り村中に小銃を亂發す小澤武三郎鳥海新之助水夫農兵を卒ひて境上を巡視する所小鍋口境上溪を傳へ官軍襲ひ來ると告ぐ依て急に此由を村上勢に告げ新三郎武之丞急に引返すへしと云はしむる所に官軍次第に迫り來り小澤隊は村の西に備へて發砲し官軍は多勢味方は寡兵敵し難し



關川村  
焼かる

と雖も小澤部卒を勵まし雷の道を開かんとするに忽ち丸に當りて傷を得て退く鳥海新之助も同く負傷二人の隊長負傷せしかば散々に打立れ味方皆森林の中に身を隠して退く官軍進て火を村中に放ち此敗を聞き新三郎は雷に引退くも此所敵を防ぐの要地にあらされは國境坂口の胸壁に退かんと人數を纏め退かんとするに關川に當り炮聲を聞ゆると雖も官軍要地を占め味方進て援ふ能はず此時に至り官軍山々峯々に満ち殆ど免かるゝに道なし新三郎令して曰く状況既に斯の如し依て人々山谷に潛み越澤若くは大鳥村に免るへしと自ら部卒四五人と村上勢貳十余人を卒ひて山谷を陟獵し辛苦して櫛引通りある松倉村に至る同十三日再び越澤に歸れば味方の敗兵多く此所に在り此日銃兵指揮安倍藤藏農兵指揮上田元治吉川銕三郎片岡峯太援兵として越澤に来る白井吉郎仙臺より報して曰く去る十日仙藩の士片山仁一郎外

數名來り當春以來東西の情互に不通事の齟齬するもの多し抑も近年歐米各國の皇國を覬覦する幕府之れに抗する能はず先帝深く宗廟社稷億兆の生靈を憂慮し幕府及尾紀越前等の親藩薩長土肥其他の諸藩に詔して万國と對峙する基本を論究せしめ稍々決する所あらんとするに臨て昭徳公薨し先帝亦崩御今上其教旨を繼かせられ上に朝廷あり中に幕府あり下に諸侯ありて政令の出る所其正を失ふを以て慶喜公云々徳川氏云々朝廷開國以來云々を以て天下の諸藩と同心協力皇國を維持するに出て且つ奥羽諸藩の方向を誤るを哀憐して寛典の御處置あるへき由土州藩及要路縉紳家の忠告に依りて弊藩始めて其過ちを知り即今謝罪降伏し又尊藩も速に謝罪して社稷を全くし皇國の爲めに力を尽されんことを寡君深く希望する所なりと云ふと雖も官軍の守備嚴にして尊藩に事情を通するを得ず密に僕等をして君に告げしむ寡君

の意中を尊藩に達せんとを希望すと云ふ今十一日仙藩の兵敗れて我三小隊悉く輜重を失ひ後藤彌右衛門及郷夫七人其死生を知らず山岸嘉右衛門本日當地に着するを以て則ち仙藩に依て先づ謝罪の事を歎願し専ら庄内より指令を待ちせ嘉右衛門も亦意見を陳ふ同十四日服部六兵衛加藤甚平黒崎又四郎犬塚泉士に兵符授けて越澤に趣かしむ此日米澤藩の重臣千坂太郎左衛門より主將右原多門に書を通して曰く其文白井吉郎報する所と同す依て陰に周旋せんどの意なり越澤の味方は關川を復せんと各隊向ふ所を部署し本道及山越して關川に撃ち入らんと夜半に兵を進む西山は第一の要地官軍胸壁を築きて堅く守りし故白井春山隊之れに當り先づ谷を隔て此方の林中に兵を伏し諸方の戦始るを機とし一齋に胸壁を乗取らんと待居るも夜明て戦尙始らす然るに官軍我兵の伏するを疑ふものゝ如く兵を林中に出して發炮し味

方堪へ兼急に胸壁に向て一齋に發炮し此時本道間道の味各々兵を進め炮聲頻りに聞ゆ各部の味方濺ひ進むと雖も官軍は要地に兵を伏して防さしかは味方死傷多く各部利あらず暮に及て諸隊越澤に引退く同廿日越澤西山の胸壁は農兵隊長河野健治か守る所なるに官軍急に襲ひ來りしに隊長健治忽ち丸に當りて倒れしかは味方散々に撃破られ第一の胸壁を乗越へ第二の胸壁をも乗り取らんとする所諸方の味方集り來りて終に官軍を退かす此日村山郡寒河江村に陣せし中村七郎右衛門か隊及桑名藩の兵官軍と戦て敗退して最上郡角川に退き翌廿一日古口村より船ふて鶴岡に歸る

と雖も小澤部卒を勵まし雷の道を開かんとするに忽ち丸に當りて傷を得て退く鳥海新之助も同く負傷二人の隊長負傷せしかば散々に打立れ味方皆森林の中に身を隠して退く官軍進て火を村中に放ち此敗を開き新三郎は雷に引退くも此所敵を防ぐの要地にあらされは國境坂口の胸壁に退かんと人数を纏め退かんとするに關川に當り炮聲を聞ゆると雖も官軍要地を占め味方進て援ふ能はず此時に至り官軍山々峯々に満ち殆ど免かるゝに道なし新三郎令して曰く状況既に斯の如し依て人々山谷に潛み越澤若くは大鳥村に免るへしと自ら部卒四五人と村上勢貳十余人を卒ひて山谷を陟獵し辛苦して櫛引通りある松倉村に至る同十三日再ひ越澤に歸れば味方の敗兵多く此所に在り此日銃兵指揮安倍藤藏農兵指揮上田元治吉川銕三郎片岡峯太援兵として越澤に來る白井吉郎仙臺より報して曰く去る十日仙藩の士片山仁一郎外

關川  
村  
焼  
か  
る

數名來り當春以來東西の情互に不通事の齟齬するもの多し抑も近年歐米各國の皇國を覬覦する幕府之れに抗する能はず先帝深く宗廟社稷億兆の生靈を憂慮し幕府及尾紀越前等の親藩薩長土肥其他の諸藩に詔して万國と對峙する基本を論究せしめ稍々決する所あらんとするに臨て昭徳公薨し先帝亦崩御今上其教旨を繼かせられ上に朝廷あり中に幕府あり下に諸侯ありて政令の出る所其正を失ふを以て慶喜公云々徳川氏云々朝廷開國以來云々を以て天下の諸藩と同心協力皇國を維持するに出て且つ奥羽諸藩の方向を誤るを哀憐して寛典の御處置あるへき由土州藩及要路緝紳家の忠告に依りて弊藩始めて其過ちを知り即今謝罪降伏し又尊藩も速に謝罪して社稷を全くし皇國の爲めに力を尽されんことを察君深く希望する所なりと云ふと雖も官軍の守備嚴にして尊藩に事情を通するを得ず密に僕等をして君に告げしむ寡君

の意中を尊藩に達せんとを希望すと云ふ今十一日仙藩の兵敗れて我三小隊悉く輜重を失ひ後藤彌右衛門及郷夫七人其死生を知らず山岸嘉右衛門本日當地に着するを以て則ち仙藩に依て先づ謝罪の事を歎願し専ら庄内より指令を待ちせ嘉右衛門も亦意見を陳ふ同十四日服部六兵衛加藤甚平黒崎又四郎犬塚泉士に兵戎授けて越澤に趣かしむ此日米澤藩の重臣千坂太郎左衛門より主將右原多門に書を通して曰く其文白井吉郎報する所と同す依て陰に周旋せんどの意なり越澤の味方は關川を復せんと各隊向ふ所を部署し本道及山越して關川に撃ち入らんと夜半に兵を進む西山は第一の要地官軍胸壁を築きて堅く守りし故白井春山隊之れに當り先づ谷を隔て此方の林中に兵を伏し諸方の戦始るを機とし一齋に胸壁を乗取らんと待居るも夜明て戦尙始らす然るに官軍我兵の伏するを疑ふものゝ如く兵を林中に出して發炮し味

方堪へ兼急に胸壁に向て一齋に發炮し此時本道問道の味各々兵を進め炮聲頻りに聞ゆ各部の味方濫ひ進むと雖も官軍は要地に兵を伏して防さしかは味方死傷多く各部利あらず暮に及て諸隊越澤に引退く同廿日越澤西山の胸壁は農兵隊長河野健治か守る所なるに官軍急に襲ひ來りしに隊長健治忽ち丸に當りて倒れしかは味方散々に撃破られ第一の胸壁を乗越へ第二の胸壁をも乗り取らんとする所諸方の味方集り來りて終に官軍を退かす此日村山郡寒河江村に陣せし中村七郎右衛門か隊及桑名藩の兵官軍と戦て敗退して最上郡角川に退き翌廿一日古口村より船小て鶴岡に歸る

戊辰ノ役庄内兵死傷人名表

月日	場所	死傷身分	氏名	月日	場所	死傷身分	氏名
四月廿四日	清川村	死	加賀山 林藏	閏四月四日	天童	死	小玉 雄藏
		士	白井 大三郎			傷	武田 米藏
			紀太 小助				長谷川 忠治
			中島 仙太夫				大山 藏松
			白石 茂兵衛				英 彦太郎
		水野家來	上杉 頼吉				高桑 駒吉
		卒	安野 五郎助				福田 傳一郎
			齋藤 順太	閏四月十一日	八聖山	卒	結城 定之助
			東 多彌太				池田 友吉
			鈴木 梯助				前田 善助
		傷	小竹 簡助				濱野 彌五郎
		士	旅河 八十治				若木音右衛門
		卒	菅原 鉄太	七月十三日	船形	卒	小澤 錠治
			兼子 總助				村田 彌總太
			齋藤 亥八郎				高橋 金四郎
			小杉 鎌吉				阿部 仁太郎
			齋藤 直治				關原 市太郎



七月廿八日	中村越	死	卒	渡部 金治	七月廿九日	中村	死	松山町兵	高橋 長太郎
同	鶴田 孫八	全	全	齋藤 保之助	全	傷	服部家來	今野 正之助	多作
同	松田 作松	全	七月廿九日	野澤 壽三郎	全	死	佐藤 龜吉	櫻井 文治	
同	野澤 壽三郎	全	全	山本丈右衛門	全	傷	田中 正治	高橋 金藏	
同	奧本 勘助	全	全	山濱 八内	全	傷	中村 權太夫	阿部 鉄藏	
同	原田 元七	全	全	小田兵右衛門	全	卒	小倉 彌五郎	生田 權太夫	
同	万年 寅吉	全	全	相澤 儀總治	全	卒	鈴木 嘉吉	木村 平四郎	
同	松浦祐右衛門	全	全	宮村 彌平治	八月五日	芹田	赤澤源次右衛門	押切 文助	
同	村田 平作	全	全	後藤 半兵衛	全	卒	池田 庄之助	奧泉 善之助	
同	農兵	全	全	善兵衛	全	卒	金子 傳之助		
同	高橋家來	全	全	某	全	卒			
同	平澤	全	全		全				

八月一日	洗釜	傷	士	正田 龍藏	八月五日	三ッ森	死	佐藤 勇五郎
同	加藤家來	卒	全	岡部 常治	全	全		佐藤 孫兵衛
同	五十嵐 幸助	全	全	渡部 雄次郎	全	全		川井 長次郎
同	青山 彌三郎	全	全	佐藤八右衛門	全	全		佐藤 富治
同	浦西 東一郎	全	全	中村 精之助	全	全		佐藤 染吉
同	木村 寅吉	八月八日	岩崎	吉太郎	全	死	山澤 染吉	佐藤仲右衛門
同	白井家人	傷	全	吉澤 小源太	全	角間	佐藤 久太	宮坂 顯藏
同	山田	傷	士	荒井縫右衛門	全	卒	佐藤 慎藏	菅原 耕作
同	大熊 敬助	全	全	片山 喜間太	全	傷	難波 六三郎	新宮 渡世平
同	邊見 勝彌	全	全	渡部 磯總太	全	全	高田 清吉	
同	八月十一日	緒手	死	長岡 衛太夫	全	全	茨木 又市	

八月十一日	八月十三日	八月十八日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日
横手	角間川	羽根川	川口	野荒町																
傷	傷	死	傷	死																
松山藩		士	卒	士																
富樫七郎右衛門	押切藤吉	堀平太夫	加藤豐助	中里清之助	町野嘯二	中川清太郎														
八月廿日	全	全	全	全	全	全														
六郷																				
死	傷																			
卒	農兵	卒		卒																
阿部 千方太	中村 頼母	須藤 卯吉	金内 珉吉	佐々木 万助	佐藤 安次郎	小笠原 幸吉	土肥 柳藏	石川 柳助	丸山 理作	三浦 文作	横山 金吉	加藤 金之助								

八月十八日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日	同日
羽根川	新和																			
傷	死																			
士	農兵	卒																		
牧 源之丞	岩間 半平	田村 鉄治	天野 一彌太	三橋 岩治	吉川 門四郎	高橋 勘助	阿部勘右衛門	竹村 又藏	寺内 藤吉	由右衛門	勇藏	木村 龜吉	中野 禎次郎	三矢家來	藤井家來	士	古川 六太郎	五十嵐 永吉	村上海太郎	
八月廿日	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
花楸							樽岡													
傷			死				傷													
卒		農兵	卒				卒	士												
加藤安右衛門	佐々木 善六	村田 榮吉	五十嵐 養助	岡田 衛士	太郎左衛門	只木 筈之助	川上 仙治	進藤 幸助	寺崎嘉右衛門	遠藤 幸助	本間 卯市	阿部 武之助	波合 伴藏	原田李右衛門	中島 文彌					



八月廿八日 鷺野 死 卒

渡部 勝吉 八月廿四日 橋岡 傷 卒

山口和右衛門 堀 濱之助 死 卒

同 押井 治助 全 傷 松山藩 卒

三橋 彌藏 全 死

藤乃 三平 高橋 助吉 卒

同 鈴木 定助 八月廿九日 君々野 死 卒

坂野 多作 全 傷

多田 良平 理右衛門 卒

同 吉川 源太郎 全 農兵

遠藤 岩五郎 全 傷

木村作右衛門 須田 完治 卒

同 須藤 卯吉 全 農兵

成澤 豐次郎 全 傷

長岡 新十郎 村田 源之助 卒

同 加藤 勝太郎 全 農兵

渡部 平治 全 傷

堀 助吉 佐木 益藏 卒

同 池田 政之進 全 農兵

鈴木 善兵衛 全 傷

守屋 岩藏 大友 精助 卒

同 志賀 仲藏 全 農兵

赤石 千太郎 全 傷

小笠原 精治 嶺岸 春之助 卒

同 加藤 健藏 全 農兵

黑崎 與助 全 傷

紀太家來 善藏 斧助 卒

同 吉田 幸助 全 農兵

勝手 卒

平林 貞一郎 中尾 定治 卒

九月十日 椿代 死 士

小野 重次郎 九月十日 椿台 死 士

永島 彌七郎 增川 滿之助 卒

同 助川家來 傷 士

加藤 八郎 全 傷

服部 寅之助 渡邊 鍊之助 卒

同 久村 久三郎 全 傷

志田 源四郎 全 傷

黑川 鷹次郎 木村 國作 卒

同 菅原 寅藏 全 傷

菅原 孝七 全 傷

本多 謙吉郎 富田 武平 卒

同 會渡 小平太 全 傷

會渡 小平太 全 傷

風見 彌三郎 加藤 真一郎 卒

同 金内 宅彌 全 傷

遠藤 彦藏 全 傷

石原 源三郎 平間寺太右衛門 卒

同 赤松 恒兵衛 全 傷

神尾 禎治 全 傷

田中 顯三 青木 榮三郎 卒

同 全 織右衛門 全 傷

下山 文之助 全 傷

岸 吉太郎 野秋彌一右衛門 卒

同 本間 榮治郎 全 傷

飯塚 謙作 全 傷

九月十一日 荻和野 死 卒

毛呂太郎太夫 全 傷

九月十二日 長濱 死 卒

同 農兵 全 傷

松山藩 全 傷

二百六十七

九月十二日 長濱

傷 死

松山卒

庄司 總次郎

九月十二日

椿台

傷

士

二百六十八

芳ヶ森 長濱

死

卒

櫻井 勝平

全

大瀧 繁治

全

安藤 權兵衛

全

多田翁右衛門

全

梶井 清三郎

全

梶原 久八

全

庄司 藤吾

全

木村 林太

全

小澤 宇平治

全

菊地 小三郎

全

須田 耕作

全

高橋 伴助

全

松田 子之八

全

早川 帆平

今井 邦太郎

中尾 繁吾

野村 織部

上野 万吉

鈴木 敬藏

菅谷 新平

志村 佐吉

梅澤 佐一郎

木村 寅吉

今泉 善藏

杉村林太右衛門

下妻 孫兵衛

石原 枝治

鈴木 榮三郎

桑島 慶治

堤 藤四郎

高橋 常五郎

九月十五日 境

傷 死

士

多田翁右衛門

全

梶井 清三郎

全

梶原 久八

全

庄司 藤吾

全

木村 林太

全

小澤 宇平治

全

菊地 小三郎

全

須田 耕作

全

高橋 伴助

全

松田 子之八

全

死

傷

卒

伊藤 荒次郎

桐田 和助

菊地 幾平治

小栗 作治

小久保伊之助

足達 長七

渡部 彌七

高橋 恒太

須藤九右衛門

木村 百太

和田 修藏

高橋 與八郎

庄司 彌六

石原 六郎

信田 金之助

富田 平太

茂泉 久内

九月十五日 境

傷

卒

鈴木 丑之助

全

小柳 銀之助

全

高橋 寅之助

全

牧 銀作

全

甲崎 佐一郎

全

六藏

全

留藏

全

彌三郎

全

革藏

全

又吉

全

竹内 善五郎

全

中澤 嘉總治

全

岡田仁和之助

全

菅原 幸之助

全

成田 林藏

全

佐藤 直治

全

高田 又三郎

全

小山田 鉄藏

全

死

傷

卒

死

傷

死

傷

死

傷

死

傷

死

傷

死

卒

死

卒

士

二百六十九

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

九月十五日 境  
 死 卒  
 傷 櫻井 孝藏  
 高橋與總右衛門 全  
 神尾 久作 全  
 渡部 安藏 全  
 高橋 彌作 全  
 三浦 久太郎 全  
 平山 銀藏 全  
 後藤 卯三郎 全  
 日野 清次郎 全  
 佐藤 豐治 全  
 死 農兵 未吉 全  
 米治 全  
 三四郎 全  
 良右衛門 全  
 岩吉 全  
 久七 全  
 多郡右衛門 全  
 九月十日 椿台  
 傷 卒  
 市橋 鉄藏  
 塚本 良之助  
 飯島 幾之助  
 中川 榮助  
 矢野 直吉  
 小楯 周平  
 齋藤 卯吉  
 朝岡家來 士  
 與之吉  
 藤七  
 榮吉  
 德兵衛  
 傳太  
 留吉  
 淺吉  
 鶴吉  
 三藏  
 柴田 壽三郎 士

二百七十

九月十五日 境  
 死 農兵 庄五郎  
 九月十日 椿台  
 死 農兵 善九郎  
 傷 甚七 全 助五郎  
 甚七 全 重助  
 多吉 全 與總兵衛  
 富吉 全 金太  
 甚七 全 本間  
 甚七 全 萬兵衛  
 與總右衛門 全 善次郎  
 淺吉 全 清九郎  
 平藏 全 太次兵衛  
 三之助 全 仁助  
 庄八 全 治郎右衛門  
 政吉 全 直藏  
 嘉總太 全 杉松  
 金兵衛 全 彦七  
 治郎兵衛 全 市兵衛  
 酒井治郎右衛門 全 上林  
 村井 敬治 全 熊記  
 山內 三吉 全 八郎治  
 死 町兵 士  
 死 町兵

二百七十一

九月十五日	荻和野	死	卒	新宮	卯助	九月十二日	椿台	傷	町兵
同	須藤	文内	全	後藤	清兵衛	全			
同	名不明	全		阿部	長藏	全			
同	林藏	全		藤藏	全				
同	己之助	全		與三郎	全				
同	豐治	全		勘三郎	全				
同	平形	全		佐治郎	九月六日	荻和野	傷	士	鎌田家來
同	農兵	全		寅次郎	全				
同	春治	全		名不明	全				
同	宇野	源兵衛	全	佐藤	象治	全			
同	阿部	廣治	全	安倍	平三郎				
同	伊藤	澤右衛門		深野	信治				
同	本間	榮次郎		下山	文之助				
同	矢澤	松藏		太田	榮之助				
同	九月廿七日	三崎	死	安倍	家來				
同	九月廿二日	汐越	死	士					
同	同	同	傷	卒					
同	同	同	死	卒					
同	同	同	傷	卒					
同	同	同	死	卒					
同	同	同	死	卒					

二百七十二

九月廿七日	三崎	傷	平林家來	榮助	九月六日	荻和野	死	卒	鈴木茂右衛門
同	同	同	卒	本間	治作	全	傷	阿部	米治
同	同	同	卒	有賀	信助	全		佐藤	直太
同	同	同	死	山口	新藏	全	死	星川	幸吉
同	同	同	傷	大瀧	友治	全	死	渡邊	悅藏
同	同	同	卒	武谷	助次郎	全		菊地	水之助
同	同	同	卒	中山	作次郎	全	傷	江口	金助
同	同	同	卒	山田	楠太郎	全	傷	高橋	與八郎
同	同	同	卒	中村	陽之助	全	傷	石原	藤助
同	同	同	卒	三浦	右衛門	全		松平	政七郎
同	同	同	傷	百瀨	美代治	全		金子	安兵衛
同	同	同	死	鈴木	又吉	全		新宮	藏吉
同	同	同	死	五十嵐	吉松	全		矢作	金平
同	同	同	死	村上	彌藤太	全		石川	彌三郎
同	同	同	傷	大川	甚之助	七月六日	木萌峠	渡會	壽助
同	同	同	死	弭間	松助	七月廿一日		岡山	平八
同	同	同	傷	小川	又七郎	七月廿二日		幸嵐	味右衛門
同	同	同	死	久田山					
同	同	同	傷	全木萌峠					
同	同	同	死	全澤田					
同	同	同	死	越后村田					
同	同	同	死	觀音森					
同	同	同	死	三崎					

二百七十三

六月廿四日	久田山	傷	卒	矢納 謙三郎	七月廿四日	村田山	死	卒	櫻井 健之助
同			士	三宅 辨治	全				木村 藤吉
同		死	卒	松浦 石藏	全	松ヶ崎		家老士	石原倉右衛門
同				佐藤 良作	全			士	英 彦太郎
同				齋藤 吉太郎	青廿四日	村田山		卒	宮本 辰之助
同				飯塚 米藏	全				高島 榮助
同				木村 文太	八月二日	西大崎	傷		田花 鎮藏
同				加藤 岩吉	全				阿部 平藏
同				梅木 清吾	全				石ヶ谷伊久太
同				竹本 勝兵衛	全	三條			石黒 甚内
同				服部家來	全				鹿野 熊太
同				小野寺 金藏	八月六日	中條			中村次郎兵衛
同				姓名不明三人	全				遠藤 繁太
同				農兵	全				遠藤 藤右衛門
七月七日	木萌峠	死	卒	茨木 新兵衛	全				成田 貢
七月十日	山田	傷		森 文治	八月廿日	仙臺旗卷			富田 伊太夫
七月十二日	木萌峠	死		上田 文作	全				山田 久太郎
同				彌藤太	八月廿八日	山熊田	死		大瀧 藤太夫
八月廿六日	鼠關口	傷	卒	今野 吉次郎	全				

八月廿六日	鼠關口	傷	卒	小池 助吉	八月廿八日	山熊田	死	卒	尾形 藤七
同				矢田部小八郎	全				土屋 新三郎
同		死	士	富樫與右衛門	全				矢田部 熊藏
同	小名部	傷		岩間 七郎	全				田花 米吉
同				關口 七郎	全				黒井 堅之助
同				鈴木 菊次郎	全				伊藤 彌吉
同		死		田澤六左衛門	九月一日	大久保山			志賀 銚七郎
同				石川 末吉	全				加賀山弓次郎
同		傷		長澤 清藏	全				大沼 文藏
同			士	小林 守之助	全				中村 久三郎
同		死	卒	菅原 儀作	全				治 吉
同				佐藤 勇吉	全				佐與治
同				富樫 仲次郎	全				治郎右衛門
同				五十嵐 金作	全				熊次郎
同				鈴木 昌助	全				定吉
同				後藤彌二右衛門	全				德治
同				東野家來	全				大井 豐太
同				士	全				志田 三十郎
九月十一日	關川			鳥海 新之助	全				
九月十日	仙臺青葉村	傷	卒		全				

九月十一日 關川  
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死

小澤 武三郎 九月一日 大久保山死 卒  
尾形 鉄三郎 全  
太田 作之助 九月三日 關川 傷 士  
八幡 久助 同 死  
齋藤 健治 全  
小林 金治 全  
與之助 全  
利兵衛 全  
幸助 全  
弭間 敬哉 全  
阿部 藤藏 全  
岡田 豹藏 全  
井上 雄介 全 小名部 傷 士  
大内 志津馬 九月廿日 關川西山死 卒  
仁科 五郎 全  
鈴木 榮之助 全  
姓名不明三人 全  
森 菊次郎 全 農兵

伊藤 寅之助  
池田 清之助  
廣木安右衛門  
山田 官司  
萩原 銀太郎  
水野 合三郎  
佐々木貞三郎  
根上 善兵衛  
桑藏  
伊之助  
忠三郎  
藤次郎  
吉岡 谷藏  
河野 健治  
武藤 平三郎  
長南 直治  
姓名不明壹人  
直右衛門

九月十六日 關川

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

傷 卒 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死 傷 死

相馬 佐兵衛 九月廿日 關川西山傷 農兵  
橫井 久策 全  
古郡 政吉 全  
川村 淺吉 全 卒  
石川 常八郎 全 農兵  
白尾 善吉 九月廿日 寒河江 死 士  
小林 源七郎 全 卒  
小田 作吉 全  
佐藤 文作 全  
富樫 善治 全 傷  
紋右衛門 全  
江口 平藏 全  
三郎治 全  
龜太郎 全  
文作 九月中 及位 死 士  
彌藏 全  
辨治 全

傳助  
嘉右衛門  
長次郎  
鈴木 小吉 太郎  
中村 健次郎  
本間 又藏  
五十嵐久之助  
阿部 梅作  
鈴木唯右衛門  
佐藤 幸作  
永井 吉太郎  
柳川 傳吉  
荒瀬 與四郎  
小田 權四郎  
上野專右衛門

九月十六日 關川 死 農兵

與總兵衛

同 利助

同 治右衛門

合計死傷六百八拾五人

內

士族死 四十八人

同 傷 八拾五人

幸族以下死 貳百拾七人

同 傷 三百三十五人

明治廿七年三月五日印刷  
全全 年全月十二日御届  
全全 年全月十七日發行

正價金三拾錢

山形縣羽前國西田川郡鶴岡町  
最上町甲拾九番地士族

著者 澁谷 光敏

全縣全國全郡全町五日町四十七番地

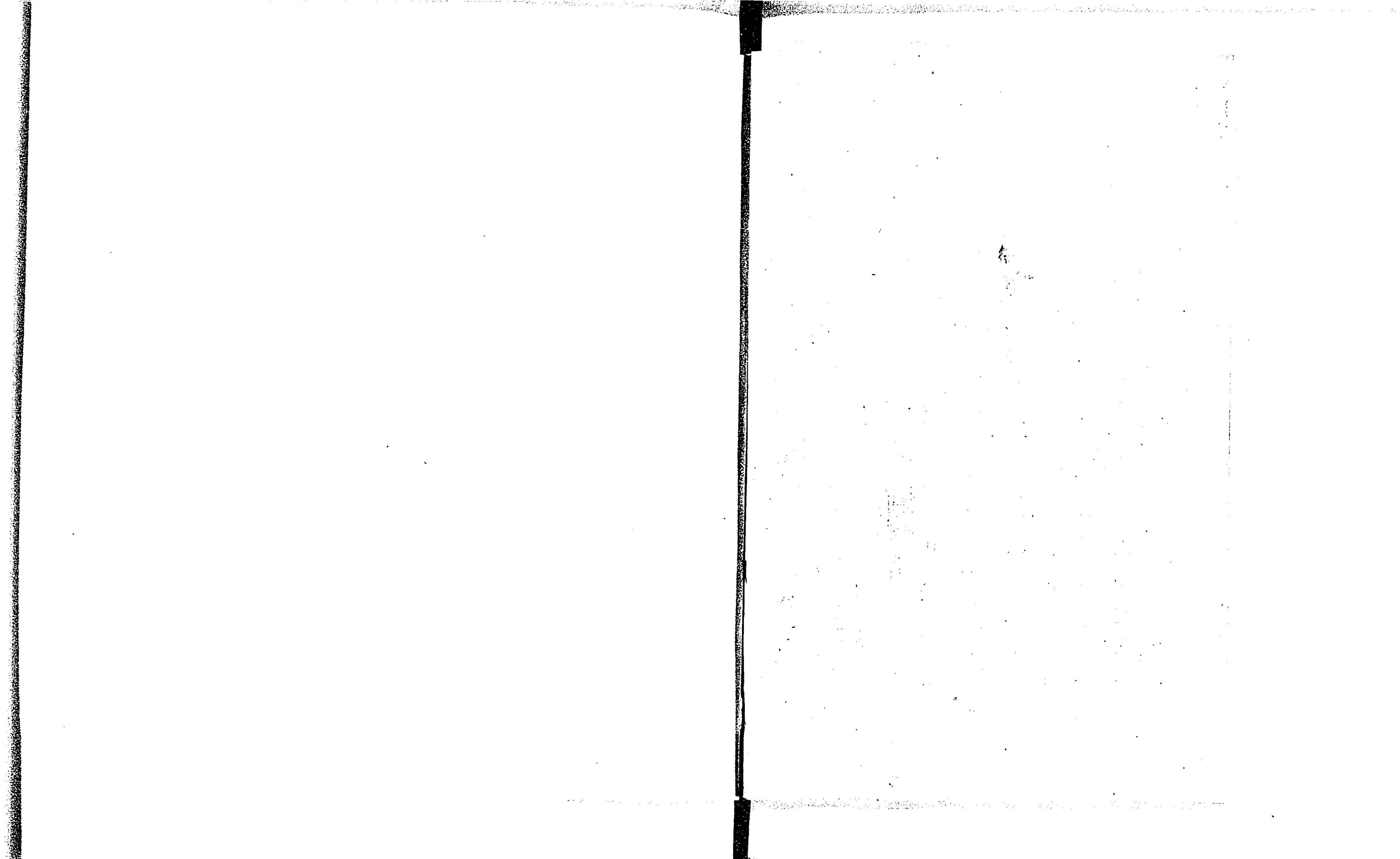
發行者 小池藤治郎

全縣全國全郡下肴町四十五番地

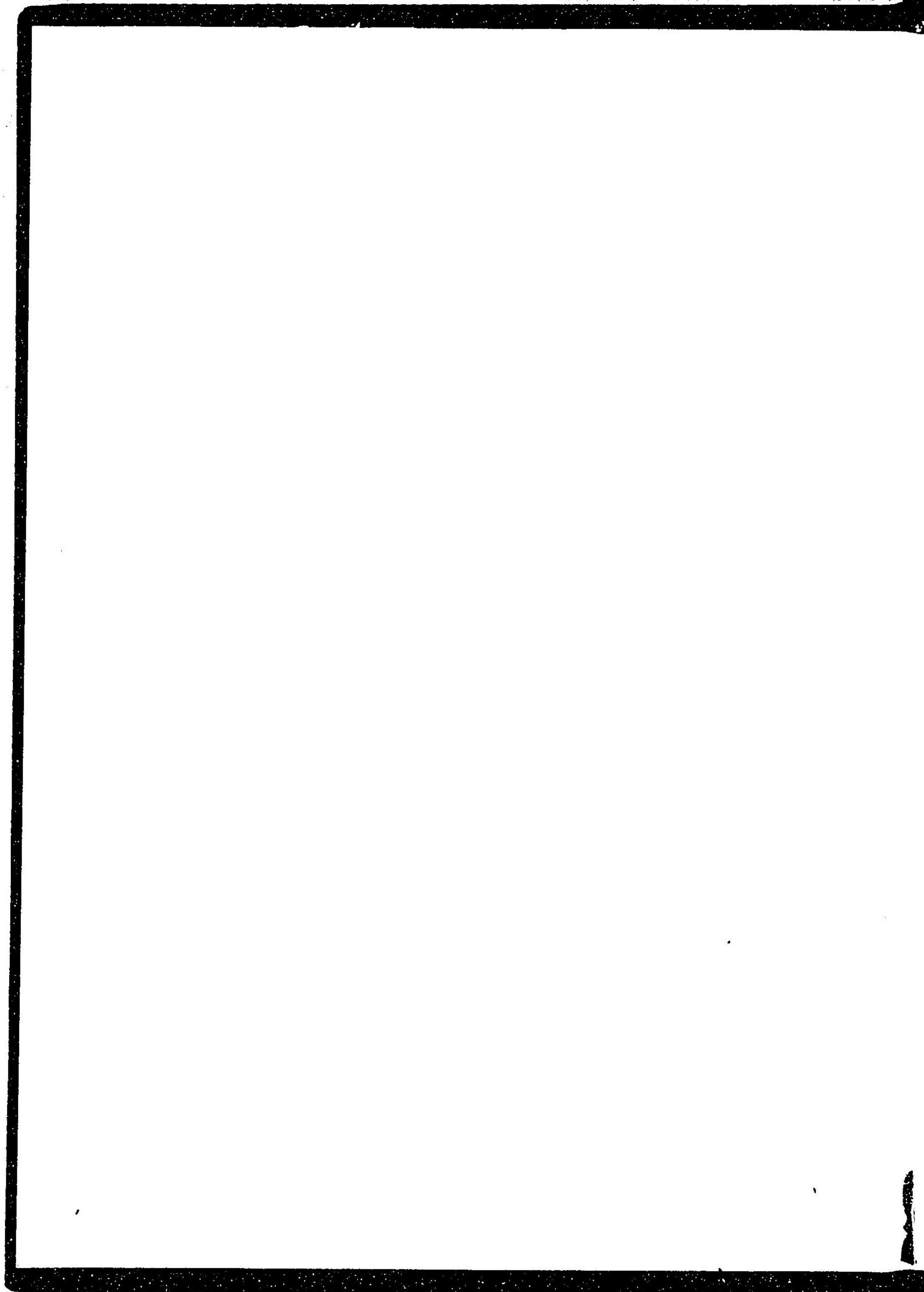
印刷者 山田 保吉

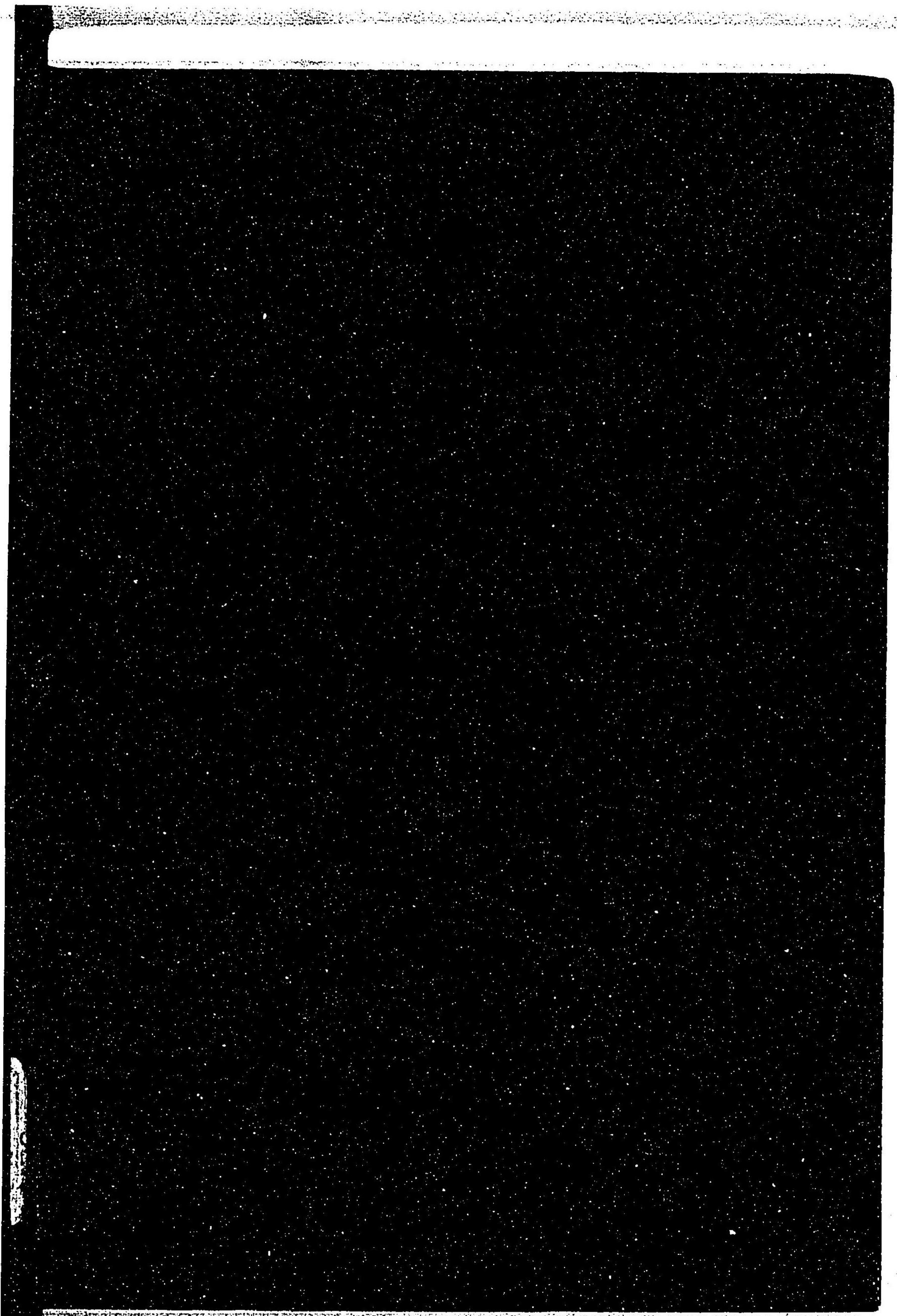
山形縣羽前國西田川郡鶴岡上肴町  
乙九拾番地印舖雲松堂

畫工兼彫刻者 服部又太郎









72  
21

023413-000-3

72-21

庄内沿革誌

渋谷 光敏/著

M27

ADC-0325



